Study Series No. 43 *March 2000*

「ピョートル大帝蔵書」と ロシアの書籍文化

岩　田　行　雄

一橋大学社会科学古典資料センター
Center for Historical Social Science Literature
Hitotsubashi University

目　次

はじめに …… 1
第1節　ピョートル・コレクションの全体について …… 1
第2節　「ピョートル蔵書」の形成過程と科学アカデミーの関連 …… 2
第3節　「ピョートル蔵書」研究史 ……3つの著作 …… 5
第4節　17－18世紀ロシアの写本について …… 7
第5節　「ピョートル蔵書」の5つの構成部分 …… 8
第6節　親族の旧蔵書 …… 12
第7節　分野別の特徴 …… 18
第8節　言語別 …… ルッボフ研究との比較 …… 30
第9節　17－18世紀ロシアの主だった個人蔵書 …… 34
(1)　17世紀の個人蔵書 …… 34
(2)　18世紀第1四半期ロシアの個人蔵書 …… 36
(3)　ピョートル後（1725－1741）の個人蔵書 …… 37
(4)　上記以外の個人蔵書 …… 40
(5)　18世紀前半の科学アカデミー図書館受入れ図書に占める個人蔵書 …… 41
第10節　16－18世紀ロシアの出版事情 …… 43
第1項　17世紀末までのロシアの出版 …… 43
第2項　18世紀第1四半期のロシアの出版 …… 44
第3項　1725－1800年の出版事情 …… 47
(1)　科学アカデミー印刷所－出版活動とその他の役割 …… 47
(2)　世俗文字による印刷所別出版点数（1725－1800）…… 49
(3)　世俗文字による分野別の出版点数（1725－1800）…… 52
(4)　世俗文字による出版点数とキリル文字による出版点数の年代別比較 …… 53
(5)　外国語による出版 …… 54
おわりに …… 56
文献 …… 57
注 …… 59

はじめに

18世紀第1四半期の治世においてロシアの近代化を強力に推し進めたピョートル大帝（1世）（1670－1725，在位1682－1725：1689年まではフョードル帝と並立）及びその時代を描いた著作は多数にのぼる。しかしながらピョートルの多面的で倦むことを知らない活動を如実に反映する貴重な原史料である彼の蔵書（多数の書き込みを含む）に関する研究はロシアでもわずかであり，日本ではこれまでロシアでの研究に基づいて正確に紹介されたことはなかった。ロシアでの研究が少数にとどまったのは，ピョートルの死後彼の蔵書がペテルブルグの科学アカデミーに移譲された時点で正確な目録も作成されず，別置されることも，なんら特別の管理をされることもなかったことに起因している。この困難な条件を克服して世に出されたソ連邦科学アカデミー図書館研究員たちの研究成果をもとに，本稿ではピョートル蔵書の紹介を中心として次の4点にわたって論ずることとしたい。

第1に，ピョートル蔵書の複雑な構成と形成過程にもふれ，その全体像を明らかにすること。第2に，ピョートルが書物を通して行った西欧文化・技術の受容を具体的に跡付けること。第3に，ピョートル蔵書が17－18世紀の個人蔵書の中で占める位置を明らかにすること。第4に，17－18世紀ロシアの出版活動全体を概観し，ピョートルがいかに大きな変革をもたらしたかを実証的にあきらかにすることである。

なお本稿では手書きの書籍を原本，複写とも「写本」，活版印刷による書籍を「刊本」と表記する。

第1節 ピョートル・コレクションの全体について

ピョートルはその生涯において書籍のみならず数多くの物を集めているが，それらは書籍・印刷物とその他に大別される。書籍・印刷物の部分はさらに，「写本及び刊本」の部分と「1枚物の地図，都市の見取図，建物や庭園の設計図，素描（以上，手書きを含む），銅版画など」に分けられる。Библиотека Петра という表現は「写本及び刊本」の部分に対してだけでなく書籍・印刷物のコレクション全体に対しても使われることがあるので，本稿では「写本及び刊本」の部分を「ピョートル蔵書」とし，全体を指す場合には「ピョートル文庫」として区別する。本稿が対象とするのは「ピョートル蔵書」の部分である。

ピョートルの死後，1725年に出されたエカテリーナ1世の勅令により「ピョートル蔵書」は科学アカデミー図書館に移譲されるが実際に運ばれたのは208冊のみである。残りの大部分が移送される出発点となったのはピョートル2世が正枢密参議官オステルマンを通じて

新たに発令した「ピョートル蔵書の移譲」に関する勅令を官房長官マカーロフが1727年12月29日付けの手紙で科学アカデミー総裁ブリュメントロストに知らせた時点である。これで「ピョートル蔵書」はようやく1728年から1729年にかけて科学アカデミー図書館に運ばれる（文献6，p.14)。2,000冊未満の書籍の移譲完了までに足掛け5年もの歳月を要したのはその任にあたるべき官僚のサボタージュが主要な原因と考えられるが，後述するように「ピョートル蔵書」が特に決められた1個所ではなく，数多くの場所に分散していたことも原因のひとつと考えられる。「地図・見取図等」のコレクションも1728年から1729年にかけて科学アカデミーに移譲され，コレクションのその他の部分と「ピョートル文庫」の一部がクンストカーメラ（博物館）に移譲される。その他の部分には，絵画，彫刻，メダル，西シベリアのクルガーン（高塚墳）から出土したバックル・腕輪・イヤリングなど金細工の装身具，シリアのリュトン，飾り壷や香炉など中国の置物，インドネシアの短剣，船の模型，羅針儀，その他さまざまな物品が含まれている。またピョートル・コレクションに含まれていないが，執務室に残されたものには旋盤，金属製の環状日時計その他がある。

第2節「ピョートル蔵書」の形成過程と科学アカデミーの関連

「ピョートル蔵書」の形成過程と科学アカデミー図書館開設の歴史は密接な関係にある。

1709年，ペテルブルグに「夏の宮殿」が完成し，時期は不明だがモスクワから帝室文庫が，また1712年に医薬庁文庫が移送される（文献8，p.12)。これがペテルブルグでの「ピョートル蔵書」の出発点となるが，この時点ではピョートルの私的蔵書は分離していない。

ピョートルは科学アカデミー創設以前から「夏の宮殿」内の書物を研究のために開放することを考えており，1714年にヨハン＝ダニイル・シュマーヘルが初めての図書館員として迎えられる。シュマーヘルはアルザス出身で，ストラスブール大学で哲学修士号を取得した人物。シュマーヘルは後述する大使節団の第一大使フランツ・ヤコブレヴィチ・レフォールト（フランス名ルフォール）の甥にあたるピョートル・レフォールトによりロシアに招かれている（文献6，p.6)。このシュマーヘルの着任の時を以って科学アカデミー図書館の始まりとされる。これはロシアで初めての国家による公共図書館そして学術図書館の誕生であった。ロシアでツァーリが私的蔵書を持つことは別に目新しいことではなかったが，公共図書館の誕生はまったく新しい出来事であった（文献6，p.9-10)。

1714年の時点までに「夏の宮殿」に集められていた書物は，帝室文庫，医薬庁文庫(注1)，ピョートルがモスクワ，ペテルブルグ及び国外で入手したもの，リガ，ミタウその他のバルト海沿岸諸都市から運ばれたものから成っていた（文献6，p.9)。

1718年末，ピョートルがアムステルダムで購入した書籍，解剖学コレクション及び博物

学コレクションが到着したことにより，科学アカデミー図書館は「夏の宮殿」を離れ独立することになる。「夏の宮殿」にある書物の大部分と「珍品の資料室」はネヴァ河沿いにある通称「キーキンの宮殿」に移される。この宮殿は「皇太子アレクセイ事件」(注2) との関連で，1718年3月17日に処刑されたA.B.キーキンから没収したもの。科学アカデミー図書館はこのキーキン宮殿内に3部屋を与えられ，本の移動は1718年と1719年に行われた（文献6，p.10)。この時点で「ピョートル蔵書」も初めて分離独立する。この時「夏の宮殿」から運び出されなかったもの，その他の場所に置かれていたもの，及びその後入手したものが「ピョートル蔵書」である。

科学アカデミー図書館は希望する誰もが無料で利用できた。検事総長П.И.ヤグジンスキィが利用者から閲覧料を徴収するよう提案したことに対して，ピョートルは利用者を引き離してしまうものとしてこの提案を拒絶している。そのうえピョートルは当時高級品であったコーヒー，ワイン，甘い焼き菓子等々の接待を国庫の負担によって行い利用希望者を惹きつけることを要望している。この慣習は女帝アンナの治世となった1730年代にも存続しており，図書館及びクンストカーメラへの高貴な訪問者に対して接待が行われていた。このためシュマーヘルに対して一定の金額が割り当てられていた（文献6，p.10)。

ピョートルの蔵書は1709年以降の初めのうちこそ「夏の宮殿」に置かれていたが，晩年には「冬宮」，ペテルゴフ及びその他の複数の宮殿にも置かれていた（文献6，p.10)。ピョートルは最も貴重な書物，地図，図版，都市の見取図等は「冬宮」内の寝室に隣接する部屋に置いていた（文献12，p.169)。また，彼は執務内容に関連のある書物を，海軍工廠，元老院，そして恐らくは工業参議会その他の官署に移動したほか，出版準備のため翻訳者に貸し与えたり，外国旅行や行軍の際にも書物を携行している。例えばピョートルは1722年5月13日にモスクワを出発し翌1723年にかけてカスピ海方面に遠征しているが，出発直前の4月18日にモスクワ印刷所から送付された砲術，築城，地理，歴史，建築，そして文学をも含む21冊の明細書が残されている（文献12，p.177)。さらに，ピョートルは最も必要度の高い書物は数部を取り揃え，何個所かに置いて利用している。このような書物の頻繁な移動と分散した利用法は行動的なピョートルにとっては合理的な方法であったが，彼の「蔵書公開」という考え方と相まって紛失の可能性も高くなり，後に「ピョートル蔵書」復元を困難にする要因になっている。紛失の具体例二つを挙げよう。

第1の例は1709年1月4日付けの翻訳官ヴィニウス宛てのピョートルの手紙。この手紙の中でピョートルは12年ほど前にオランダ語から翻訳するために貸した「花火製造術と花火」についての本を探すように依頼している（文献4，p.6)。第2の例はピョートルの蔵書が横領されていた事件。官房長官であったA.B.マカーロフが1730年代に収賄と秘密文書隠蔽のかどで取り調べを受けた事件との関連で，彼の15櫃の内容明細が残されている。その15番目の櫃の内容明細には合計129点（そのうち50点が写本）のロシア語文献が含まれてお

り（文献6，p.17），この中に『ピョートル蔵書目録』で確認できるタイトルが5点ある。

科学アカデミーそのものは1724年1月22日にピョートルの承認を得た「科学及び芸術アカデミー設立に関する基本構想案」に基づき，1725年12月27日にペテルブルグに開設される。これはピョートルの基本理念の具現化であり，ピョートル時代ロシアのひとつの到達点であった。正式名称は「ペテルブルグ科学及び芸術アカデミー」（文中では「科学アカデミー」と略）。科学アカデミーの施設としては従来から準備されていた図書館及びクンストカーメラ（博物館）の他に学術用の器具を製作するためのアトリエがある。研究対象とした分野は自然科学では数学・力学，物理学，天文学，地理学，化学，生物学（植物学及び動物学，解剖学及び生理学），人文科学では言語学，歴史であった。科学アカデミー設立は西欧各国のアカデミーを参考にしているが，神学部門を持たないところにもピョートルの基本理念が明確に反映している。

開設時までに着任したアカデミー正会員は17名（教授13名，助教授4名）全員がロシアに招聘された外国人研究者で，ドイツの哲学者C.ヴォルフ（1679－1754）の仲介によるドイツ人が多数を占めていたが，フランスの天文学者でコレジュ・ド・フランス教授であったG.ドリール（1688－1768），スイスの数学者一家のニコラス・ベルヌーイ（1695－1726）及びダニエル・ベルヌーイ（1700－1782）も含まれていた（文献1，p.2－6）。そして1726年以降も数学者L.オイラーを始めとする外国人研究者の採用が続けられた。当初ロシア人会員は一人も採用されなかったが，科学アカデミーにはИ.-B.パウゼ，И.K.ロッソヒンをはじめとする多数の翻訳官が勤務していた。そして彼らの中から科学アカデミー会員が誕生している。翻訳官B.E.アダドゥーロフ（1709－1780）は1733年にロシア人初の科学アカデミー正会員として高等数学の助教授に就任し，これをを皮切りにロシア人の科学アカデミー正会員への登用が始まる。Г.H.チェプロフが1742年に正会員として植物学の助教授，M.B.ロモノーソフ（1711－1765）は正会員として1742年に物理学の助教授，1745年に化学の教授に，また翻訳官B.K.トレジアコフスキィ（1703－1759）も1745年に正会員として弁論術の教授に就任している（文献1，p.9－14）。

科学アカデミーは開設後にギムナジウム及び大学の開講（1726年）をしている。「開校」とせず「開講」としたのは，当初ギムナジウムに恒常的な施設が与えられず私邸で授業が行われていたこと（文献7，p.144），また大学も1747年にいたるまでは講義が不定期に行われていたことによる（文献7，p.148）。このような不十分さが見られる一方で，科学アカデミーは印刷所創設（1727年初頭）（文献7，p.129），ワシレーフスキィ島にクンストカーメラの新しい建物が完成しクンストカーメラと図書館が移転（1727年），クンストカーメラ屋上に天文台用の3層の塔を建設開始（1727年），クンストカーメラの建物内に解剖教室開室（1728年）と基本構想に沿って充実がはかられた。図書館とクンストカーメラの公開は1728年11月25日に始められ，図書館の開館日は火曜日と金曜日の週2回で閲覧時間は午後2時

から4時までの2時間であった（文献7，p.57)。だがピョートルは科学アカデミー開設を目にすることなく1725年1月28日にこの世を去っている。

ピョートルの死後科学アカデミーに移譲された「ピョートル蔵書」は科学アカデミー設立の基本理念と合致し，初期科学アカデミーにとって蔵書の中核を成すものであり，他に代わるもののない貴重なコレクションであった。約800冊のロシア語書籍は科学アカデミーが初めて受入れたロシア語文献コレクションであった。そしてまた第9節で見るように外国書籍の入手が簡単ではなかった当時のロシアにおいて寄贈受入れないしは購入した個人蔵書による書籍収集の先駆けとなった点でも「ピョートル蔵書」が果たした役割は非常に大きなものがある。ツァーリの私的蔵書が一般に公開されたことも「ピョートル蔵書」を措いて他に例を見ない。しかしながら「ピョートル蔵書」は別置されることもなく，書誌学的に完備した目録が作成されることもなかった。ただ移譲の際に作成されたきわめて不十分な目録だけが残された。これは蔵書目録というよりは財産目録であった。

第3節「ピョートル蔵書」研究史 …… 3つの著作

「ピョートル文庫」に関する本格的研究は1950年代にソ連邦科学アカデミー図書館写本・稀覯書部のM.H.ムラゾーノワを初めとする研究員たちにより着手される。そして「ピョートル蔵書」に関するまとまった研究としては今日までに次の3点が刊行されている。

① M.H.ムラゾーノワ他著『科学アカデミー図書館手稿部フォンドの歴史的概説と要覧：第1巻 XVIII 世紀』（以下，『歴史的概説』）モスクワ＝レニングラード，1956年刊（文献6)。当初ムラゾーノワらの手がかりは，1725年にアカデミー図書館に移譲された外国語刊本を中心とする117点208冊（露写本4，洋写本6を含む）のロシア語版及びラテン語版『譲渡目録』だけであった。調査は1728年の『譲渡目録』を探し出すために書庫の写本を1冊ずつ点検することから始められ，その過程で書込みや製本の特徴からさまざまなことが判明した。1728年の『譲渡目録』(1,200点）も発見されたが，この手書きの目録は現代の目録規則からは程遠いもので，外国語書籍に関してもすべてキリル文字で書かれていた。筆跡から明らかに複数の人物が目録作成にかかわっていると判断されており，比較的正確な部分がある一方で，著者，出版地，刊年等の不記載，書名の意訳，単に「地理学3冊」「幾何学2冊」等と省略された粗雑な部分があり原本の特定には大きな困難が伴った。『歴史的概説』はこのような長期にわたる地道な作業の積み重ねにより「ピョートル蔵書」の写本部分の全容と外国語刊本の一部分を解明し，1725年及び1728年『譲渡目録』を公刊した記念碑的労作である。同書には「アレクセイ蔵書」に関する研究論文と写本30点のリスト，「医薬庁文庫」の55点の文献リスト，歴史家B.H.タチーシチェフから科学アカデミーに贈られた写

本55点のリストその他もあわせて掲載されている。

なお，ムラノーゾワは「ピョートル蔵書」中の写本をピョートル以前のモスクワ時代と1689年以降のピョートルの時代に区分して論じているので本稿でもこの区分に従う。

② С.П.ルッポフ著『18世紀第1四半期のロシアの書物』レニングラード，1973年刊（文献12）。同書は『17世紀ロシアの書物』（文献11）及び『ピョートル後の時代1725－1740年ロシアの書物』（文献13）と並ぶルッポフの3部作のひとつで，綿密な古文書調査に基づいておりロシアの書籍文化史を研究する上で不可欠の文献である。同書が「ピョートル蔵書」に言及しているのは第5章の一部分（p.166～184）で全体のリストもないが，ルッポフは『譲渡目録』に基づき1,621冊を分野別，言語別に分類しその全体像を示している。また後述する「ナターリヤ蔵書」と「アレクセイ蔵書」にも言及している。

③ Е.И.ボブローワ編『ピョートルⅠ世蔵書：索引・便覧』（以下，『ピョートル蔵書目録』）レニングラード，1978年刊（文献4）。編者のボブローワは『歴史的概説』で「ピョートル・コレクションの中の外国語刊本についての概観」を執筆担当しており，その後20年にわたって研究を続け『ピョートル蔵書目録』を完成させている。同書は『歴史的概説』の研究を基礎に，『譲渡目録』以外の資料をも参考にしながらピョートルが利用した可能性のある書籍1,663点（1,986冊）をリストアップ。そして全体をロシア語写本293点（297冊），ロシア語刊本490点（491冊），外国語の写本68点（72冊），外国語刊本812点（1,126冊）に区分し各々をアルファベット順に配列しているが，分野別，言語別の分類はしていない。また，同書では1,663点のうちピョートルの所有が正確に立証出来た1,075点を太字で表記し，科学アカデミー図書館が所蔵していない95点にはタイトルの前に＊印を付している。本稿ではこの『ピョートル蔵書目録』の1,663点についての初の試みとして分野別，言語別，出版地別，年代別の分析（〔表1〕－〔表5〕）を行う。言語別分類の際にルッポフは「スラヴ語及びロシア語」と正確に表現しているが，ボブローワは「ロシア語」としているので，ここでは「ロシア語」に統一しておく。

「ピョートル蔵書」全体の形態的な特徴としては，全紙の大型本が89点171冊含まれており，2折判（フォリオ）も650点752冊と多い。その他の判型は4折判556点611冊，8折判388点444冊で，12折判以下は48点57冊。ピョートルの所有を示す蔵書票はなく，装丁への刻印（super ex-libris）があるものも1冊のみ。外国語刊本の装丁は贈り物を別とすれば全体的に丈夫な皮装で質素なものが多い（文献6，p.149）。収集及び出版では挿絵，図版が重視されている。ひとつの原本から露訳写本と露訳刊本がそれぞれ出版され，その3点とも所有しているものが5例に及ぶのも大きな特徴である。

第4節　17－18世紀ロシアの写本について

「ピョートル蔵書」には293点（297冊）のロシア語写本が含まれている。推定年代順に見ると最古のものが14世紀中葉の『奉事経』で，以下16世紀7点，16世紀末－17世紀初頭1点，17世紀107点（108冊），17世紀末－18世紀初頭8点（10冊），18世紀初頭・18世紀第1四半期139点，年代不明30点31冊である。17～18世紀と比較的新しい年代のものが254点（約87％）と多数を占めるのは次に述べるようにロシアの特殊事情を反映したものである。

1450年代にグーテンベルグによりドイツのマインツで始められた活版印刷術は比較的短期間のうちにヨーロッパの各地に広まり，15世紀末の時点ですでに240の都市で書籍印刷が行われ，数多くの印刷業者が活躍していた。しかしながらイワン4世（雷帝）の治世の1550年代に書籍印刷を開始したロシアでは，国策により17世紀末までは基本的に国営のモスクワ印刷所1個所で行われていた。そして印刷されるほとんどすべての書籍は，異端の発生を防ぐためにモスクワ総主教の「祝福」と称する検閲を受けた奉神礼書（典礼書）及び奉神礼書ではない宗教的内容の書物であった。16世紀は19点すべてが奉神礼書，17世紀は488点のうち奉神礼書が411点，奉神礼書ではない宗教的書物が68点で，世俗的内容の書物はわずか9点のみであった。このロシア正教会主導による宗教偏重の極端な出版政策のもとで，17世紀ロシアにおいては西欧とは違って刊本の普及により写本の制作が急速に衰えることはなかった。

写本制作が衰えなかった全般的状況を分析してルッポフは次の4点を指摘している。第1に，17世紀末まで刊本は非常に高価であり，それに比して写本の方がしばしば安かったこと。第2に，売れ行きのよい本は特に地方では入手出来ず，珍しい本になるほど売りに出るのを探しているよりは本を書き写すほうが速かったこと。第3に，17世紀後半のロシアにおいては住民のかなりの部分が分離派に従っており，彼らはニーコンによる教会改革後にモスクワ印刷所から刊行された書籍を敵視していた。そして写本と教会改革以前に刊行された古版本のみを認めていた。第4に，刊本はその主題においては恐らく住民の間に高まりつつあった出版物への要求を満たすには程遠い状態にあった。そしてピョートル時代以前の出版物にロシアの社会思想の発展が反映しておらず，ロシアの文学は写本の世界においてのみ成功裡に発展したこと（文献11，p.37-38）。

ルッポフはさらに18世紀第1四半期の写本制作に関しても次の3点を指摘している。まず第1に，ピョートルの時代には世俗的内容の書物が数多く出版されるようになったが，文学（読物）の分野は少数にとどまっており，市場のすべての需要に応えていなかった。ルッポフらが文学の分野に含めている演説・説教，頌詩（または頌詞），儀式を叙述した作品だけが多数供給されていたにすぎない。そのため様々な種類の物語，説話等は写本の形態で書き写され，改作され，新たに創作され続けた。第2に，支配階級の意向と一致しな

い内容の多数の作品が写本の形態でのみ普及した。ピョートルの改革に同調しなかったか，あるいはピョートルを含むピョートル時代の個々の活動家に対して否定的な態度をとった著者の作品，また分離派のすべての文献も写本または分冊の形態をとった。第3に，写本はこの時代においても17世紀に引き続き高価ではなく，時として刊本よりも安いことがあった。その結果頻繁に刊本から写本が作られていた。その1例として『イエルサレム崩壊の物語』が挙げられている（文献12，p.108)。したがってロシアにおいて書籍印刷が開始されて以降ピョートル時代の終りまでロシアの書籍文化については写本を抜きに語ることは出来ない。そしてこれらの時代の書物についてふれる場合には，対象とする書物が刊本，写本のどちらなのかを明確にしておかなければならない。

以上は全般的な状況であるが，「ピョートル蔵書」に関していえば，ツァーリまたはその家族に対して捧げられた写本が数多く含まれているという特殊な事情が加わる。

「ピョートル蔵書」中の写本を時代区分で見ると，モスクワ時代はロシア語写本のみだが，ピョートル時代はロシア語写本のほかに外国語写本68点がある。外国語写本の中にはピョートルに捧げられた軍事書と数学書各1点，ピョートルとエカテリーナにハンブルク歌劇場支配人から送られたドイツ語による『楽譜』(1716)1点，エカテリーナ1世の戴冠式の際にイギリス国教会牧師から送られた頌詩1点が含まれている。

第5節　「ピョートル蔵書」の5つの構成部分

「ピョートル蔵書」はおおむね，親族の旧蔵書，贈られたもの，自分で購入したもの，臣下に委託して購入したもの，側近などの旧蔵書と5つの部分から構成されている。側近などの旧蔵書は，ブリュース（側近：陸軍砲兵元師ほかを歴任）32点41冊，ヴィニウス（翻訳官）18点25冊，パウゼ5冊，アレスキン4冊，フェオファン・プロコポーヴィチ3冊，オステルマン（外交官，鉱山責任者ほか）2冊，ガンニバル（ハンニバル，詩人プーシキンの母方の曾祖父）1冊，医薬庁文庫11点16冊で，これらが贈られたものか返済すべきものだったのかは不明である。そう考える理由として次の事例を挙げておきたい。

「ピョートル蔵書」の中にブリュースの旧蔵書が含まれており，その中の1冊に万有引力の法則に係わるニュートンの主著『自然哲学の数学的原理』(初版1687，ロンドン，羅）の1714年刊アムステルダム版（羅）がある。これはピョートルが1717年にブリュースから受け取った本（贈られたとはなっていない）のリストに載っている（文献6，p.156)。スコットランド系3世のブリュースはピョートルの命により1698年から1699年にかけて祖父の故国イギリスで数学，天文学，航海術などを学びこれらの分野でピョートルの施策を支えた。彼はそればかりではなく，軍事（特に砲術)，外交，政治の分野でも大きな役割を果たしな

がら1735年に没するまでロシアで最初にニュートンの理論を本格的に研究を続けた人物である。ブリュースは1,410点の蔵書を持ち，数学，天文学，物理，力学，光学の分野だけで200点を超えていたが『自然哲学の数学的原理』はほかに持ち合わせていない。したがってブリュースがニュートンの主著を簡単に手放したとは考えにくい。

親族の旧蔵書については第6節で，また側近などの旧蔵書については第9節でふれることとし，ここではピョートルが贈られたもの，自分で購入したもの，臣下に委託して購入したものに係わる大まかな状況についてふれておきたい。

ロシアでは少なくともピョートルの時代まではロシア語の刊本は刊行時にツァーリ及びその家族，政府の高官，高位聖職者等に贈呈される慣習が存在した。したがって「ピョートル蔵書」中のモスクワ及びペテルブルグで刊行された刊本は基本的には贈られたものと考えることが出来る。ただし『ピョートル蔵書目録』の中にモスクワやペテルブルグで刊行されたすべてのものが含まれている訳ではない。

17世紀のロシアにおいて外国語の書籍が書店で販売されていたか否かについては明らかではない。しかしながら，ツァーリや高官に対する贈り物として，またおそらくはロシアに滞在する外国人のもとでは売買されていたと考えられている。外国旅行もまた外国書籍を入手する絶好の機会であった。18世紀に入ると，1708年にスウェーデンに勝利したロシアが支配地域をバルト海沿岸にまで拡大しエストニアの首都レーヴェリ（現ターリン）を，また1710年にはラトヴィアのリガを手中に収める。その結果これら2大港湾都市をはじめとするバルト海沿岸地方でもある程度は外国の書籍を入手することが可能となる。外国人商人を通じての取り寄せも行われたが，外国旅行の際の買い付けが最も有力な手段であった（文献12，p.128）。

ピョートルは1697－98年にオランダ・イギリスを中心に，また1717年にはフランス・オランダを中心に長期の西欧旅行をしている。第1回目は，政治的にはヴァチカンおよび各国との反トルコ同盟結成を目的として1697－1698年に派遣された訪欧「大使節団」の「一員」として加わっているが，この旅行を通じてピョートルをはじめとする参加者の見聞，習得した技術と知識，各地で獲得した技術者と物資がピョートルの改革の基礎となり，新たなエネルギーとなる。ピョートルは2回目の西欧旅行で1717年に訪れたフランスにおいて特に文化面で大きな影響を受けており，パリを中心とするフランス滞在に関しては政治家のサン・シモン公爵（1675－1755）の手記が主要な手がかりとされている(注3)。

大使節団に関しては第一大使レフォールトとギーセンによる日誌及び使節団の出納帳をもとにした研究により行程と金銭の収支を伴う行動をかなり正確に把握することが出来るうえ，その後ピョートルが展開する一連の施策との関連が多いので詳しくふれておきたい。

「大使節団」は1797年3月2日に先遣隊が出発し，3月10日に本隊がモスクワを出発している。出発時の人員構成は次の通りである。

〈大使〉 第一大使レフォールトとその随員14名，第二大使Ф.А.ゴローヴィンとその随員8名，第三大使П.Б.ヴォズニーチンとその随員2名。第一大使は使節団全体を代表して外交交渉にあたり，第二大使は使節団の中にあって起草など実務の中心を担い，第三大使は個別の問題に対応する役割を果たした。3人の大使は随員の数や役割ばかりでなく俸給にも2,920ルーブリ，2,300ルーブリ，1,600ルーブリと大きな差があった。

〈使節団全体にかかわる成員〉書記官補7名，翻訳官2名（羅，独，蘭），通訳官3名（様々な言語，使節庁より），金銀細工師2名，医師1名，クロテン毛皮師1名，宮廷付属教会の司祭及び輔祭（カトックでは助祭）各1名，道化4名。クロテンの毛皮は高級品として珍重されており，贈り物用として大量に運ばれたので毛皮師を必要とした。

〈「志願兵」集団〉35名。軍事及び造船を含む海事研究のためにメーンシコフをはじめとするピョートルに近い人物で構成され，表向きは「志願兵」の「砲手」となっている。「志願兵」集団は第1グループ11名，第2グループ14名，第3グループ10名に分けられ，構成メンバーは地位や家柄をあらわす名称を用いずに姓・名だけを名乗り，ピョートルは「ピョートル・ミハイロフ」の偽名で第2グループに属した。「志願兵」集団には12人の奉仕担当者が付いた(注4)。

〈警護兵〉62名（プレオブラジェンスキィ連隊より）。

以上の他に宮内庁または酒精部，食物部，パン部，穀物部等の官署から食糧や飲み物とともに派遣された給仕，執事補佐，料理人，パン焼き担当その他の下級官吏がいた。彼らのうちの大部分はノブゴロドまで，そして一部分がリガまで同行した（文献5，p.11－13）。

出発時総勢は250名以上，ソリ1,000台であったが，この人数は上述したように全行程同一人数ということではなかった。また使節団の人員構成も変化したが，その理由は兵卒から志願兵集団への異動またその逆のケースがあったこと，外国では翻訳官，通訳官，医師，伝令，トランペット手その他の新たな投入が必要となり人員が増大したことであった。

使節団は常時全体が一緒に行動したわけではない。ピョートルは本隊が出発する前日の3月9日に密かにモスクワを離れており，全行程において「志願兵」集団の全員または一部分と共に独自行動と本隊への合流を繰り返している。使節団は6月8日の時点ですでに砲術研修のためにプレオブラジェンスキィ連隊の5名を残してケーニヒスベルクを出発している。そしてオランダに到着してからも使節団の構成員は適性に基づいて与えられた任務に従い様々な動きをしている。ピョートルの不在は極秘事項とされた。留守を任されたロモダノーフスキィはじめモスクワとの連絡は勿論手紙で行われた。発信から受信まではオランダ，イギリス双方ともほぼ1ヶ月なので，用件の確認には最低で約2ヶ月を要した。ピョートルは特に翻訳官ヴィニウスと頻繁に手紙のやり取りをしている。ヴィニウスとの間での手紙にピョートルは出発当初から秘密通信用のインクを使用しており，アムステルダム到着直後の8月23日にはフランツ・フォン・ボハルトというドイツ人とおぼしき人物

から秘密通信用のインクを購入している（文献3，p.19)。

使節団の大まかな行程はリガ，ミタウ，ケーニヒスベルク，ベルリン，ブランデンブルク，ユトレヒトを経由して8月16日にアムステルダムに到着する。当初は海路でオランダまで行く予定で，依頼によりデンマーク政府が護衛の艦船を差し向けていたが，戦争時にフランス政府に雇われていた海賊の艦隊と遭遇する危険があるとの情報により陸路に変更された（文献5，p.102)。

オランダには翌1798年5月15日まで滞在し様々な分野での技術・学術習得に励む。ピョートルはアムステルダムの東インド会社造船所で造船及び船舶に関する技術の習得に多くの時間をさいている。造船作業には同僚として「志願兵」から10人が選抜され，それ以外の「志願兵」とプレオブラジェンスキィ連隊の何名かの兵士は適性に基づき他の作業に配置された（文献5，p.158)。ピョートルは途中で他の日程をこなしながら造船所で全長100フィート（1フィート＝30.48cm）のフリゲート艦《ペテロとパウロ号》建造作業に1697年8月30日の起工からほぼ完了の1月まで加わっている。そして船大工としての技術の他に，ロープ結び，釘打ち，板張り，運び上げ，取り付け，帆の張り方，コーキング（隙間を防ぐこと)，鉋かけ，タール塗り等の技術，艦船建造様式，設計図の製図を学んでいる（文献5，p.270)。ピョートルは出版にも多大な関心を持っており，アムステルダムで知り合った出版者ヤン・テシングの家を訪れている（文献16，p.320)。そして当時の出版先進国オランダでの出版を考え，帰国後ピョートルはヤン・テシングにキリル文字による世俗的内容の書籍，地図，図版の出版の特許状を与えている。その結果アムステルダムでキリル文字により20点が出版されている。ピョートルはまたアムステルダムで銅版画の技術の習得にも挑んでいる。指導したのはオランダの銅版画家アドリアン・シホーネベーク（1661-1705)。ピョートルは彼をロシアでの勤務に雇うことに成功し，シホーネベークは1698年10月にモスクワへやって来る。そしてシホーネベークは武器庫付属の銅版画工房を組織し，ピョートル・ピカールトがその後継者となる。工房はのちに印刷局に移されるが，この工房がロシアでの銅版画と銅版画入り書籍出版の礎となる（文献12，p.57)。

1698年1月7日にピョートルは15人の随員を伴って使節団本隊を離れ，ヨットでロンドンに向かい11日に到着する（文献5，p.296)。そしてイギリスを発つ4月25日までの間にデトフォート，ポーツマス，オックスフォード大学，英国王立学会，王立学会博物館，王宮，ロンドン塔の造幣局，グリニッヂ天文台その他を訪問している。またイギリスで軍人，技術者等74人をロシアでの勤務のために雇っている。ピョートルは奢侈を好まず，個人的支出としての皇室費を大きく削減（注5：金額）するほどの倹約家であったが，必要と思うところには予算を惜しみなく投入している。訪欧中にロシアでの勤務のために雇用した外国人は約850人に達し（注6：職種と人数)，購入した物資は学術的資料及び器・機材，武器，軍事物資，1699年のアゾフ艦隊作戦用食糧2万人分など大量である（文献5，p.419)。

書物購入に関してはそれほど多くないが次のような記録が残っている

1698年1月7日に書名は不詳だが数学書と考えられる書籍1冊及び数学器機購入。1698年4月17日ロンドンにて解剖学書1冊購入。1698年5月13日アムステルダムにて銃砲及び羅針盤用のカッターと砲術の本1冊購入。1698年ロシアへの帰路ドレスデンにて使節団の急使アダム・ヴァイドがピョートルのために書籍（複数）を購入。冊数及び書名は不詳。これらの書籍購入に関する記録は一部分である。ロシア向けの船に積み込まれた物品のリストの中で書籍購入の規模についてある程度うかがい知ることの出来る報告書があり，第1に書籍と器機の詰まった大きな櫃が記されている（文献3，p.18－19)。

書籍とは別に新聞購読料支出の記録も残されている。翻訳官ヴルフがアムステルダムに到着した8月16日から9月19日までの間の自費で支払っていた新聞講読料を9月19日に支出。新聞購読は全体として翻訳官の義務であった（文献3，p.57)。17世紀末までのロシアでは印刷による新聞は発行されておらず，通称『クラーントゥイ』という手書きの新聞が発行されているだけであった。翻訳官による新聞購読は情報収集と同時に，1703年にロシアで初めて発行された活版印刷の新聞『ヴェードモスチ（報知)』への布石にもなっている。

ピョートルがイギリスに滞在した期間中の最大の話題としてニュートンとの直接の出会いがあったかどうかということが度々取りざたされる。ピョートルは1698年4月13日にブリュースを伴ってロンドン塔の造幣局を訪問し，4月21日にも再訪している。当時ニュートンは造幣局監事の職にあり，出会いの可能性は高い。しかしながらイギリス側の研究でもロシア側の研究でも出会いの事実を証明する資料はこれまでのところ確認されていない(注7)。また，1713年6月までのピョートルとブリュースとの往復書簡を見てもニュートンの文字はない。ニュートンとロシアとの接点は唯一1714年のメーンシコフとの往復書簡にある。英国王立学会会長であったニュートンはイギリス商人を通じてメーンシコフから王立学会の会員に加えてほしいとの懇請の手紙を受け取っている。この手紙に応えてニュートンは王立学会が臨時総会において満場一致でメーンシコフを会員に選出したことを伝えているが，学問には無縁のメーンシコフを選出したこの決定は100％政治的判断に基づくものであった（注8：手紙の訳文)。

第6節　親族の旧蔵書

「ピョートル蔵書」には親族の旧蔵書と見なすことが出来るものが数多く含まれている。それぞれの部分にそって調べてゆくと，書物の内容と同時にピョートルに連なる様々な人間関係も見えてくる。ピョートルが相続したのは親族の蔵書のすべてではないが，これまでの研究で「ピョートル蔵書」の中に親族5人の旧蔵書が含まれていることが判明している。その5人の親族は，父親のアレクセイ・ミハイロヴィチ帝（1629－76，在位1645－76)，異

母兄のフョードル・アレクセーエヴィチ帝（1661－82，在位1676－82），異母姉の皇女ソーフィヤ・アレクセーエヴナ（1658－1704，共同統治者1682－89），実妹の皇女ナターリヤ・アレクセーエヴナ（1673－1716），息子で皇太子だったアレクセイ・ペトローヴィチ（1690－1718）。以下それぞれの旧蔵書の内容について詳しくふれておきたい。

なお18世紀末までは書名に賛辞や内容説明を加えた長いものが多いので，本稿では以下の各節でふれる書名の日本語訳は意味を損なわない範囲で省略して短いものにした。

父アレクセイの旧蔵書と見なすことが出来るのは，写本３冊。アレクセイに捧げられた1670年用の写本の暦，アレクセイのために書かれた『鷹狩りの本』と，もう１冊はシメオン・ポーロツキィがアレクセイを称えるために書いた『ロシアの鶯』。同書は1667年９月１日に新年の始まりと皇子アレクセイ・アレクセーエヴィチが皇位継承者として公布された二重の喜びを祝してポーロツキィから献呈された。ポーロツキィはアレクセイ・ミハイロヴィチ帝の信頼を得て1667年から皇子アレクセイ・アレクセーエヴィチの傅育官となり，1670年にアレクセイ・アレクセーエヴィチが夭逝した後には皇子フョードル及び皇女ソーフィヤの傅育官を務めた人物である。

兄フョードルの旧蔵書に関しては彼の死後1682／83年に写本及び刊本280冊の目録が作成されている。そのうちの131冊が写本，69冊が刊本，残る80冊は写本・刊本の別は不明。フョードルの個人的興味のほか宮廷付属教会との関係から宗教書が約60％を占め，残る約40％が世俗的内容の書物。後者には，歴史，軍事，外交，地理，天文学，医学，数学，建築，文学が含まれている。約80％がロシア語で，約20％がラテン語及びポーランド語である。И.Н.レーベジェワの研究によればフョードルの死後ピョートルのもとに運ばれたのはその中の12冊。それ以外は，まず姉ソーフィヤの邸宅に運ばれ，２週間ほどしてツァーリの工房に移され，その後散逸している（文献10，p.89）。フョードルの蔵書には彼の所有を示す書込みは残されていないが，「ピョートル蔵書」を調査したレーベジェワは製本，本の木口，装飾その他の特徴から，モスクワ時代のロシア語の写本13冊とピョートル時代のロシア語の写本１冊をフョードルの旧蔵書と見なしている（文献10，p.90-91）。筆者としてはピョートル時代の１冊を外見の特徴の類似から敢えてフョードル旧蔵書とみなすことについては異論があり，ここでは13冊としておく。13冊の内訳は，宗教６，歴史４，頌詞２，文学１，初等読本１冊である。

モスクワ時代の写本は「ピョートル蔵書」のなかでは古い時代に属するが，その中でも377枚の細密画入り聖人伝『聖なるニフォントの言行録』は16世紀第３四半期と推定される。頌詞２点はいずれもアレクセイ・ミハイロヴィチ帝の逝去とフョードルの即位に対して捧げられた著作で，１点はシメオン・ポーロツキィが自作の『主への最後の調べ』に自筆のメッセージを添えてフョードルに贈ったもの。もう１点はキエフ＝モギーラ・コレギウム時代のシメオン・ポーロツキィの恩師ラザーリ・バラノーヴィチが自作の『哀歌』に自筆のメッ

セージを添えてフョードルに贈ったもの。『初等読本』は皇子フョードルのために1660年代に作成されたもの。その他にイヴァン雷帝のクールプスキィ公爵宛書簡を含む歴史的内容の『手稿集』(フェオファン・プロコポーヴィチ旧蔵書)等が含まれている。

姉ソーフィヤの旧蔵書と見なすことが出来るのはロシア語の写本6冊。内訳は，頌詞4，宗教1，宗教音楽1冊。頌詞には，シメオン・ポーロツキィの弟子シリヴェストル・メドヴェージェフがソーフィヤに献呈した著書『皇帝フョードルの死への哀悼と慰め』及び同書の副本，カリオン・イストーミンがソーフィヤに捧げた頌詩他1点がある。宗教音楽は『楽譜付き聖詠経(詩編歌)』。この本はシメオン・ポーロツキィの『音節詩編』を転用した作品で，1687年に聖歌隊輔祭(助祭)ワシーリィ・チトーフがソーフィヤに贈ったもの。Ф.A.トルストイのコレクションの中から発見された同書を，科学アカデミー図書館が1855年に他の書籍とともに受け入れている。

妹ナターリヤの旧蔵書は，1728年に科学アカデミーが受け入れた際の「B.ナターリヤ・アレクセーエブナ邸からのロシア語書籍譲渡目録」には211冊記載されおり，ルッポフの研究によれば233冊になるが，『ピョートル蔵書目録』で確認できるのは202冊ですべてロシア語の書籍である。書込みによりナターリヤへの贈り物であることが判明しているのは，ロシア語の写本『絵入り聖人伝集』1冊だけだが，皇太子アレクセイの旧蔵書と考えられる刊本23冊(宗教17，法律2，歴史，文学，言語，読本各1)及び写本1冊(宗教)が含まれている。23冊の刊本のうち17冊にアレクセイの書き込みがある。宗教ではモスクワの出版物が7冊なのに対して，キエフ7冊，オストローク，モギリョーフ，ヴィルナ各1冊とモスクワ以外の出版物が多数を占めている。宗教以外の分野ではロシアについての初めての歴史書であるインノケンティ・ギゼーリ著キエフ刊『シノプシス』第2版(1678)，メレティ・スモトリツキィ著モスクワ刊『スラヴ語文法』(1648)，モスクワ刊『法典(会議法典)』(1649)，モスクワ刊『教会スラヴ語，ギリシャ語，ラテン語による初等読本』(1701)，フランス語から露訳されたペテルブルグ刊『ルイ14世の海軍及び海軍工廠に対する勅令』(1715)などがある。これらアレクセイの旧蔵書の一部分がナターリヤのもとに運ばれてきた時期は不明だが，24冊すべてがロシア語で外国語がふくまれておらずナターリヤの蔵書全体もロシア語のみで構成されていること，24冊のうち17冊にアレクセイの書き込みがあること，そしてまたアレクセイの生育歴から彼の死後ナターリヤの希望により運ばれたものと推測することが出来る。アレクセイは1698年に父ピョートルと母の関係が破局し，母がスズダリのポクロフスキィ修道院に幽閉されたあと，最初は叔母H.K.ナルイシキナ，その後はナターリヤのもとで育てられているからである。

ナターリヤ旧蔵書202冊の内訳は写本32，刊本170(ロシア語165，露・伊1，露・蘭1，露・羅・独3)。分野別(カッコ内はアレクセイ旧蔵書)では，宗教書が140(18)冊で69.3%を占める。その中の67(6)冊は奉神礼書(典礼書)，48(10)冊が神学的内容のもの，残り25

(2)冊は『聖人伝』等の宗教的主題の読み物である。宗教的主題の読み物を「文学」に分類する研究者もあるので，その考えに従えば宗教書は115(16)冊で56.9%となる。他に，宗教音楽3，教会暦5冊，がある。文学は9(2)冊で，その中にモスクワ刊露訳『イソップ寓話』(1712) が含まれているが，その他はポルタワの勝利を称えるもの3冊，リヴォニアの解放を祝うもの1冊など。その他の分野は，歴史11(1)，言語5(2)，地理，築城，砲術各4，海軍4(1)，法律4(1)，数学，初等読本各3，建築，造船，政治，演劇，暦各1冊である。

ピョートルより1才年下のナターリヤは当時のロシアで最も教養ある女性と評される人物で，「ピョートルの改革」の支持者でもあった。ピョートルの時代以前のロシアを見た外国人たちの印象として述べられているところでは，ロシアは女性たちが人前に出ることや何らかの自分の希望を表明する権利も持たず，父親あるいは夫に全面的に従属し「2階の部屋」で隠遁生活を送っている国であった。しかしながらピョートルの時代になると女性たちの姿を商店や町中で，さらには社交の場でも見かけたことが記されるようになる（文献20，143－144)。ナターリヤはそうした社会の変化の中でも，当時の女性としては突出した形で新しい時代の雰囲気を体現する一連の行動をとっている。ナターリヤは外国人の社交界が好きで，ピョートルと共にモスクワ城外の外国人居留地を訪れることもあった。

1699年3月1日にはブランデンブルグ大使への表敬の祝宴とそれに続く催しが行われ，その場にナターリヤを始めとする女性達が参加している。公的な祝宴に女性が参加することはロシアでは初めての出来事であり，これはドイツでのピョートルの体験に基づくものであった。1697年7月27日，ピョートルはベルリン，ブランデンブルクを経てオランダに向かう途上，ブランデンブルク選帝侯妃ゾフィー・シャルロッテから晩餐会に招かれている。この宴席には彼女の母親であるハノーヴァー選帝侯妃ゾフィーをはじめ上流家庭の女性達が多数出席しており，音楽やダンスも宴に彩りを添えていた（文献5，p.112－115)。二人の妃との会話もはずみ，晩餐会はピョートルに鮮明な印象を与えている。これがブランデンブルク大使に対する表敬パーティの由縁だが，ナターリヤは1700年にはモスクワの南約450km位置するヴォロネジでの艦船の進水式に特別に参加し，またある時にはピョートルと共に腑分けに立ち会うなど非常に行動的で話題も多い（文献12，p.177)。

ナターリヤのもとには上記の蔵書とは別に「喜劇の写本のコレクション」が存在した。ナターリヤは劇団を作ってこれを主宰しており，宗教的及び世俗的内容の喜劇を上演していた。公演はすべての人々に開かれており，恐らくは啓蒙的な意義を持っていたであろう妹の劇団の公演をピョートルも楽しみにしていた（文献12，p.177－178)。ピョートルの幼少時にモリエールの喜劇『心ならずも医者にされ』がモスクワで上演されたことが伝えられており（文献17，p.421)，それ以後もロシアの演劇に関する話題は喜劇が基調となっている。大使節団の記録では1697年12月と1698年1月22日にアムステルダムで，またロンドンで1月15日ほか1回観劇に支出をしているがいずれも喜劇である。

1698年には喜劇役者イワン・スプラフスキィが「ツァーリへの勤務」に就いている。スプラフスキィの演劇活動に関する記録は伝えられていないが，1702年にはかれがダンツィヒで招聘の交渉にあたったヨハン・クンストとその一座がモスクワにやってくる。クンストは使節庁に赴き年報の前払い，喜劇用木造建築の許可及び建築資材の給供を願い出る。その結果彼の希望通りにモスクワの赤の広場に幅15サージェン（1サージェン＝2.134m），奥行き20サージェン，高さ7サージェンの劇場が完成するが，この劇場の完成までは外国人居住地にあるレフォールトの大邸宅で喜劇と合唱が上演されている。1703年にクンストが世を去り，1704年に新たな座長兼舞台芸術の教師としてアルテミィ・フュルストが招聘される。そしてこの年からロシア人の喜劇俳優の養成も開始される。ナターリヤはこのフュルストに依頼して1707年に舞台衣装を，また1709年すなわちポルタワでの勝利の祝賀行事がモスクワで開催された年に舞台用の大道具をプレオブラジェンスコエ村に送ってもらっている（文献17，p.422－427）。

ナターリヤの演劇活動は突然にではなく，以上のような時代の動きの中で生まれたものであった。「喜劇の写本のコレクション」はナターリヤの劇団用の台本で，彼女が自ら執筆したものも含まれていた。このコレクションはナターリヤが逝去した翌年の1717年3月28日になぜか武器庫の薬室倉庫に移送される。1722年の時点で同所に51冊が保管されていたとの記録がある（文献12，p.178）。これらの写本が保存されていれば初期のロシア演劇史の貴重な資料となる。しかしながら存在は不明で，洪水による喪失も伝えられ『ピョートル蔵書目録』にも含まれていない。

ナターリヤ旧蔵書は「ピョートル蔵書」に内包されるためこれまで目立つ存在ではなかった。しかしながら女性に読み書きすら教えていなかった時代にロシアの歴史上初めて女性が形成したコレクションとして，またナターリヤという人物がそれ以上注目に値する。

息子アレクセイの旧蔵書の全容を示す資料は残されていない。目録上で確認されているのは次の4件367冊である。第1は，1718年の初めに皇太子事件に関連して設置された秘密調査官房による家宅捜査の際に，アレクセイの所領ロジェーストヴェノ村で押収されたロシア語書籍36冊（写本28，刊本8）。第2は，同時期に書記官補ニキーフォル・ボグダーノフのところで押収されたロシア語の楽譜45冊（写本44，刊本1）。第3は，従僕イヴァン・アファナーシエフ・ボリショイのところで押収された写本11，刊本3，地図2，図版1。第4は，アレクセイの死から10年後の1728年にリガから科学アカデミー宛に送付され，アカデミー図書館が受入れたリストが残されている269冊（ロシア語刊本1，外国語写本5，外国語刊本263）。以上のほかにムルザーノワが科学アカデミー図書館で発見したロシア語書籍31冊（写本3，刊本28）を加えた合計398冊が判明しているが，発見されているのはアレクセイ蔵書全体の一部分である。その後1978年及び1984年にククーシキナとレーベジェワがヘルシンキ大学図書館で25冊を発見している（文献9，p.59）。

アレクセイは11歳になった1701年からマルティン・ナイゲバウエル，1703年からはハインリヒ・ヒュイセンにより教育を受けている。同年4月22日にはヒュイセンが執筆したアレクセイの教育に関する指示書がピョートルの承認を得ている。指示書にはアレクセイが学ぶべき書籍がリストアップされており，部屋用の図書として事前に取り揃える必要性についても述べられている。この指示書はロシア語写本，ドイツ語訳写本の両方とも「ピョートル蔵書」として残されている。この教育の一方で，1702年にアレクセイはピョートルによってアルハンゲリスクに連れて行かれ，メーンシコフのもとで軍事教練を受け，その後はノーテブルク，コピリエ，ヤンブルク，ニーンシャンツ，そして1704年ナルヴァ占領の場に居合わせる事になる。モスクワを離れてウクライナ，ポーランドその他の地を移動しながらピョートルの軍事的，実践的課題を遂行する中でアレクセイは勉学からも離れてしまう（文献6，p.127)。しかしながらアレクセイが国事と勉学を両立させ1708年にドイツ語の勉強を再開し，さらにはフランス語の勉強をも始めたことが伝えられている。アレクセイは1709年に外国語，築城，幾何学その他の勉学及び花嫁選びのためにドレスデンに派遣される。そして1709－1711年の間に外国旅行をしており恐らくは多数の書籍を購入しているが，それらのうちの14点（22冊）については判明している（文献6，p.128)。アレクセイは1714年にも外国に滞在している。この年に彼は結核の疑いからチェコの温泉療養地カールスバードに滞在しているが，当地以外にもプラハ，エルフルト，フランクフルト・アン・オーデルなどで教父たちの著作及び神学分野のドイツ語書籍を多数購入していることが出納帳に記されている（文献6，p.130)。またアレクセイはゴリーツィン，A.И.ナルイシキン，モスクワ印刷所長ポリカルポフ，キエフ府主教イオフなどの様々な人物，いろいろな場所から書籍の贈り物をうけており，ノヴゴロド主教館の出納担当者フェオドーシィからアレクセイの所領ロジェーストヴェノ村宛てに1716年だけでも2月7日5冊，2月25日3冊，3月27日11冊，4月1日1冊と20冊の写本が送られている（文献6，p.137，423)。

『ピョートル蔵書目録』の序文でボブローワはナターリヤ蔵書に含まれるアレクセイ蔵書をロシア語書籍18冊（文献4，p.7)，その他にアレクセイ蔵書として83冊（写本27，刊本56)（文献4，p.13）と述べている。しかしながら，『歴史的概説』の注記を綿密に付合わせると，上述したようにアレクセイが国外で購入した記録やノブゴロドなどからアレクセイ宛に送られたことが明らかなものが他にも多数あり，これらをピョートル自身による収集とすることは出来ない。したがって本稿では，前者を24冊，後者を106点125冊（写本34，刊本125)，合計149冊と見なして論を進める。130点149冊の内訳はロシア語の写本27冊，ロシア語の刊本29冊，ドイツ語の写本7冊，外国語の刊本67点86冊。分野別では宗教61点64冊，歴史15点21冊，言語9冊，文学6点7冊，築城4点7冊，哲学4冊，数学4冊，地理3冊，農業2点3冊，医・薬学，海軍，軍事，建築，法律，暦各2冊，紋章学1点4冊，砲術1点2冊，その他6冊，分野不明2点3冊。

以上に述べた親族5人の旧蔵書は現在では「ピョートルとその家族の旧蔵書」として科学アカデミー図書館手稿及び稀稿書部において一括管理されている。

第7節　分野別の特徴

ここではまず西欧の文化，技術の受容という観点から外国語書籍及びロシア語への翻訳書を各分野で何点かずつ紹介し，その後に他のロシア語文献について言及する。文中で紹介する書名は特に断らない限りすべて「ピョートル蔵書」である。

「ピョートル蔵書」中の外国語書籍74点が露訳されている。その74点を底本の言語別に見ると，ラテン語30，ドイツ語23，フランス語17，オランダ語13，イタリア語5点，ポーランド語4点，ギリシャ・ラテン語2点，スウェーデン語2点ほかとなっている。分野は築城,砲術,建築,地理,歴史をはじめ全般にわたる。「ピョートル蔵書」中の露訳本は再版，改定版，原本を所有しないものを含め126点である。

カッコ内に刊年（写本は推定制作年），言語，旧蔵者名等を付記する。

なお〈表〉及びカッコ内の外国語について次のように略記する：ロシア語＝露，ドイツ語＝独，フランス語＝仏，ラテン語＝羅，オランダ語＝蘭，イタリア語＝伊，ポーランド語＝ポ，スウェーデン語＝ス，ギリシャ語＝ギ。また〈表〉中の分野別の名称も数学＝数，物理＝物，工学＝工，文学＝文，初等読本及び読本＝読などと略す。

海軍33点38（露24）冊。海軍力の増強はピョートルの最大の課題であった。1696年にアゾフを占領した後，ヴォルガ河の中流に位置するヴォロネジを拠点に艦船を建造しアゾフ海方面の艦隊を強化した。さらにスウェーデンとの北方戦争を続ける中でバルチック艦隊を創設し，強化している。外国語文献はP.オスト著リヨン刊『海軍の技術，あるいは艦船移動概論（全5巻）』(1697，仏）とその露訳写本（18世紀第1四半期），K.アラール著アムステルダム刊『ヨーロッパにおける軍神の行軍（全2巻)』(刊年なし,第1巻蘭・仏，第2巻蘭)，写本『海軍の教育』(17世紀，英）ほか。ロシア語刊本では繰り返し刊行された信号に関するものが多く，『漕船艦隊の全般的信号』3点（1714～1715)，『戦闘時艦隊の全般的信号』6点（1714～1719，露・蘭併記)，『艦隊の全般的信号』3点（1708，1710露，1714露・蘭)，『ロシア艦隊投錨・抜錨時の信号』(1719)，『ロシア艦隊の全般的信号』5点(1716～1719)，『帆船及び漕船艦隊の信号』(1723）など。

航海・海事・河川航行34点38（露8）冊。H.デザギュリエ著アムステルダム刊『航海術』(1714，仏）はピョートル訪仏後の1718年にピョートルへの献辞入りで第2部 が刊行されている。そのほかに数学を含む入門書J.セラー著『実践的航海（全3巻)』第7版（1694，英，ブリュース旧蔵書)，オランダの数学者アブラハム・デ・フラーフ の未定稿（ラテン

語）から恐らくはその抜粋をコピエフスキィが露訳したアムステルダム刊『航海教本』(1701)，ブイエ著アムステルダム刊『河川航行の方法』(1696，仏）とその露訳刊本初版(1708）及び第2版（1713)，恐らくはピョートルと面識があったと言われるP.-D.ユエ著パリ刊『昔の商業と航海の歴史』(1716，仏）及びその露訳写本（1718)，オベン著アムステルダム刊『航海・造船辞典』(1702，仏）など。

造船22点24（露8）冊。外国語写本では「ピョートル蔵書」としては珍しい英語の写本『イギリス軍艦船のサイズ一覧』(1695）及び独・蘭・露・英4つの言語による『艦船の設計図（第1巻）』(1714－1715）がある。刊本ではアムステルダム刊『オランダの新しい艦船建造』(1680，蘭)，K.アラール著アムステルダム刊『オランダの新しい艦船建造（全2巻)』(1705，蘭）とその露訳写本（18世紀第1四半期）及び露訳刊本（1709）がある。ロシア語の写本には『様々な艦等の軍船の規格』(18世紀第1四半期)，『艦船建造技術の書』(年代不明)，刊本には『イギリス艦船艤装の均整』(1716)，『造船の技法』(1718）がある。

築城・要塞建造85点116（露17）冊。この分野は同じ著者の著作が目立つ。その代表的な例が1671～1698年に繰り返し刊行されたA.M.マレ著『戦争の技術（全3巻)』の仏語版5セット及びオランダ語版（1687)。S.Le P.ヴォーバン著『築城法』も3点（1689，1692，1694，仏）と1689年版からの露訳刊本（1724）がある。ヴォーバンは築城法よりも「平行線接近法」と呼ばれる攻城法を考案したことによりフランス陸軍に多大な貢献をした人物。『ピョートル蔵書目録』中に数学，建築等をあわせて17点が記載されているJ.C.シュトゥルムの著作では『仮想的，折衷的軍事建造』(1702,独）とその露訳写本（18世紀初頭）及び露訳刊本(1709）の3点が揃っている。同様に5点の築城術書が記載されているM.クーホルンの著作レーワルデン刊『湿地及び低地での新築城法』(1702，蘭，ナターリヤ旧蔵書）もその露訳写本(18世紀初頭）とブリュース監訳の露訳刊本（1709）がある。なおロシア語写本にプーシキンの母方の曽祖父A.П.ガンニバル著『幾何学と築城（全2巻)』(1725－1726）がある。これはピョートルの後継者であるエカテリーナ1世に捧げられたもの。

砲術38点56（露10）冊。外国語の写本には『フランス式大砲と臼砲の部品の図面』(18世紀第1四半期，仏）がある。刊本ではE.ブラウン著ダンツィヒ刊『砲術の最新基礎知識と実践（全6巻)』初版（1682，独）及び第2版（1687，独）と前者からの露訳刊本初版(1709，ブリュース監訳）及び第2版（1710）がまとまている。J.S.ブーフナー著ニュルンベルク刊『砲術の理論と実践』(1682，独，ブリュース旧蔵書）は1704年のナルヴァ包囲・攻略の際に後方支援を担当していたアレクセイが見つけ，ブリュースに贈ったもの。J.S.ブーフナーの著作はこの他に『砲術の理論と実践（全3巻)』(1685－1706，独，ヴィニウス旧蔵書）と刊年のない同名の書（1巻物）2点があり1711年にペテルブルグで露訳も刊行されている。なお，露訳写本『火器，様々な武器の技術』(1685）は当時13才のピョートルの命によりドイツ語版（1603，原本はフランス語）から翻訳されている。

軍事全般（海軍を除く）57点77（露20）冊。外国語刊本は2世紀ギリシャの軍事史家T.アエリアヌス著ヴェネツィア刊『兵士の訓練法』(1552，羅)，著者名なしのパリ刊『ヨーロッパの軍事力（全8巻)』(1693－1696,仏)，同じくアムステルダム刊『ヨーロッパ，アジア，アフリカ，アメリカの軍事力（全12巻)』(刊年なし，仏）がある。外国語写本では『歩兵教練』(17世紀,独)，『攻撃と防御の実践』(18世紀第1四半期,独）など。ロシア語書籍では，ドイツ語版から翻訳され刊本としてはロシアで最初の軍事書『歩兵合戦陣形の教義と策略』(1647)，北方戦争でのロシア軍の武器を賞賛する『軍神の書』(1713)，ペテルブルグ刊『如何なる正当な根拠で北方戦争を始めたか』(1717年）など。その他にモスクワ刊オランダ語版『ロシア・スウェーデン戦争』(1708）がある。

工学24点25（露3）冊。冊数は多くないがテーマはいろいろである。ピョートルは1696年のアゾフ占領後にヴォルガ・ドン運河建設に着手し，ジョン・ペリーを始めとする閘門技師を招いているが，この分野の書籍も2点ある。1点はB.カステッリ著ボローニャ刊『水流の計測』(1660，伊)，もう1点はP.-J.マールベルガー著ドレスデン＝ライプツィヒ刊『河川と運河の航路開拓』(1723，独）である。後者には見返しにヨーロッパ及びアジア・アフリカの一部分の地図があり，そこにはロシアで新たに造られた運河が線で示されている。そして44－45頁にはすでに完成した運河と同時にピョートルが目指す北ドヴィナ川とシベリアの河川を結ぶ水上交通網，即ちアルハンゲリスクから北氷洋を経て日本にいたる構想が述べられている（文献6，p.160)。またピョートルは当時の先端技術である旋盤に注目して自らその技術を習得し執務室にも旋盤を置いていたが，多数の銅版画入りのC.プリュミエ著リヨン刊『旋盤の技術』(1701，羅・仏）及び1716年に同書から翻訳作成されたオランダ語ロシア語対訳写本の存在がその熱意を証明している。ピョートルはまた庭園造りの重要な要素である噴水にも大きな興味を持っていた。この分野4点のうち1点はフランスの王室建築家・物理学者S.deコー（1576頃－1626）の主著フランクフルト刊『動力の論拠』(1615，仏）で，消火ホースから手の込んだ噴水まで様々な機械について記述している。コーはハイデルベルク城庭園を始めとする庭園造りを手がけたほか，復動蒸気機関を発明したことでも知られている。噴水に関してはこのほかにR.O.deストラーダ著フランクフルト刊『噴水建造のために風車,水車,馬，人力を利用したあらゆる種類の設計』(1617－18,仏)，アウグスブルク刊『さまざまな噴水の発明』(刊年なし，独)，I.deコー著ロンドン刊『水源よりも水を高く上げるための新しい発明』(1657，仏）がある。このほかの分野ではJ.-C.ワイゲル著『新機械工ハンドブック』(刊年なし，独)，鉱山作業に関するもの，消火ホースに関するもの各2点など。

数学57点66（露13）冊。I.ニュートン著アムステルダム刊『自然哲学の数学的原理』(1714，羅，ブリュース旧蔵書)，オランダ人数学者A.ヴラック著『対数表』(1681，羅）をはじめ，幾何学，三角法，算数教科書，数学辞典など。なおピョートルはライプニッツと

の親交が伝えられているが，「ピョートル蔵書」にはライプニッツの著作は含まれていない。

物理２点。力学６（露４）点。光学７（露１）点。オランダの数学・物理・天文学者C.ホイヘンス著ハーグ刊『簡約な天体望遠鏡』(1684，羅）を含む。

化学６点８（露２）冊。フランスの化学者・薬学者N.レムリ著パリ刊『化学教程』(1697，仏）及び同書ドレスデン刊ドイツ語版（1698）を含む。

地理学42点58（露11）冊。外国語刊本及びその露訳本を中心に紹介するとB.マルリアーニ著ローマ刊『都市ローマ』(1544,羅)，B.ヴァレニウス著イエナ刊『地理学概論』(1693，羅）とその露訳写本（1716）及び露訳刊本（1718)，J.ヒューブナー著『今日までの新旧地理学からの簡約な問題』第３版（1694，独，ブリュース旧蔵書）とその露訳写本（1713，パウゼ旧蔵書）及び露訳刊本（1719)，G.N.シェムロー著アムステルダム刊『実用地理学』(1715，仏，アレクセイ旧蔵書）とその露訳写本（1715)，P.A.フェッラリウス著パードヴァ刊『地理辞典』第２巻（1675，羅）と同書を改作したロシア初の地理学書の初版（1710)，第２版（1715)，第３版（1716)，N.サンソン著アムステルダム刊『地理学入門』(刊年なし，仏）などがある。その他に外国語写本では教科書として作成されアレクセイに捧げられたE.グリュック著『ロシアとドイツの地理』(1703,独)，ロシア語写本では『モスクワから諸都市迄の露里』(18世紀初頭，アレクセイ旧蔵書)，大使節団がオランダで雇用した副提督K.クリュイス著『ドン河を含む新しい地理書』(1703－04）がある。

地誌42点71（露ナシ）冊。旅行記も歴史書と並んでピョートルが幼い頃から興味を持っていた分野である。アムステルダム刊『新しいローマの記述』(1661，蘭)，M.ツァイラー著フランクフルト刊『イタリア，フランス，ドイツ風土記（全15巻)』(1673－1683，羅)，S.ロジッサール著ライデン刊『イタリア紀行（全３巻)』(1706，仏)，J.ビーヴレル著ライデン刊『イギリス，アイルランド紀行（全８巻)』(1707，仏)，C.J.アルバレス著アムステルダム刊『スペイン，ポルトガル紀行（全６巻)』(1715，仏)，アムステルダム刊『アイスランドの見聞記（そしてグリーンランドの見聞記)』(1715，仏）などがある。ロシア，シベリア，タターリヤに関する著作が12点あるがその中にN.ヴィトセン著アムステルダム刊『北方及び東方タターリヤ』初版（1692）とアムステルダム刊第２版（1705）が含まれている。初版はイワン，ピョートル両帝に捧げられたもの。ヴィトセンはアレクセイ・ミハイロヴィチ帝の戴冠式の際にモスクワに滞在していたことがある旅行好きな人物で，ピョートルがオランダ滞在中にアムステルダム市長だった彼は造船に関して多くの手助けしている（文献６，p168)。またロシアについての紀行文の中に閘門技術者として1698年にイギリスから招かれたジョン・ペリーの著作の仏語版ハーグ刊『大ロシアの現在』(1717）が含まれている。その他にA.オレアリウス著ハンブルク刊『ペルシャ，モスクワ大公国旅行記』(1692，独)，C.ブライン 著アムステルダム刊『モスクワ大公国，ペルシャ，インドへの旅』(1714，蘭）及びその仏語版（1718)，J.J.ストライ著アムステルダム刊『モスクワ大公国，

タターリヤ,ペルシャその他数カ国への旅』(1681, 仏)がある。ストライの著作から二つのロシア語写本が作られている。ひとつはリヨン刊の同書(1684, 仏)を底本とした『ロシア最初の軍艦アリョール号建造についての知見』(1720年代)。アリョール号はステンカ・ラージンの反乱で彼らの軍勢に奪取されてしまった軍艦である。もうひとつの写本はオランダ語版からの抄訳で『ステンカ・ラージンによるアストラハン破壊について』(1701)。アフリカ, 中近東, アジアに関するものはO.ダッパーの著作9点などがある。

地図30点44(露1)冊。オランダ語版(刊年なし)1点2冊を含むN.サンソン著『アトラス・ヌーヴォー』の種々の版10点13冊(1658, 1681, 1692, すべて大型本),『航海・貿易地図帳』(1715, 仏, 大型本), 海図11点22冊など。

宇宙学10点25(露4)冊。ホイヘンス著『宇宙論』(1698, 羅)とブリュース監訳の露訳刊本第2版(1724), 宇宙学, 月面地理学, 天体観測器の利用, 天球儀についてなど。

博物学7点8(露1)冊。ピョートルは博物館建設に情熱を傾けていたが, この分野にはコレクションの目録が2点含まれている。1点はJ.ヴィルデ著アムステルダム刊『ヤコブ・ヴィルデ博物館蔵カメオ・コレクション』(1703, 羅)で, ヤコブ・ヴィルデ博物館・図書館の所有者でもある著者から贈られたもの。もう1点はF.ライス著『動物界－ライス所蔵剥製の宝庫』(17世紀末－18世紀初頭,羅)でこの著者から博物学コレクションを購入している。その他にピョートル気に入りの美しい写本でスイスの女流画家M.S.メーリアン(1647－1717)著『昆虫図鑑』(1683－1713,独)がある。

医学・薬学・獣医学13点14(露3)冊。医学の父と呼ばれるヒッポクラテスの膨大な著作のごく一部分を刊行したオランダのリュグデューニ刊『格言』(1633, 羅)とその露訳写本(18世紀第1四半期), フランスの外科・産婦人科医F.モリソー著ニュルンベルク刊『妊娠・出産する女性』(1717, 独, ブリュース旧蔵書), 同じくF.モリソー著ドレスデン刊『有名なフランス外科医の700の臨床例』(1709,独), 出版地不明の『薬局方』(刊年なし,独), ドイツ語の貿易品リストからの翻訳で作成されたロシア語写本『家庭医療全書(旅と家庭の救急箱)』(1720年代), L.コルニウス著ライプツィヒ刊『診察と処方:完全な健康状態で百年を超えて生きるために』(1707, 独)など様々である。

解剖学7点(露なし)。ピョートルが解剖学コレクションを購入したアムステルダムの解剖学者F.ライス著の写本『ライスの解剖学宝典』(17－18世紀初頭, 羅)が含まれている。ピョートルが医学の中で解剖学に最も興味を持っていたことは知られているが文献は少ない。それはピョートルがラテン語を得意としなかったためで, 彼は文献の代わりに解剖学コレクションを購入したものと考えられている(文献12, p.173)。

建築109点141(露6)冊。非軍事的な建築に関する書籍は歴史への興味とあいまって点数, 冊数ともに築城及び要塞建造よりも多い。言語別でも仏34点40冊, 独29点43冊, 伊20点25冊, 蘭10点13冊, ラテン語7点8冊と多様であるが, これは挿絵を見れば一目瞭然だ

からである。「ピョートル蔵書」の中では歴史的評価の高い文献が最も多い分野である。紀元前1世紀ローマの建築家・建築理論家のP.M.ヴィトルヴィウス著『建築書』はアムステルダム刊ラテン語版（1649），アムステルダム刊仏語版（1681），パリ刊仏語版（1684）の3点。16世紀イタリアの建築家G.B.da ヴィニョーラ（1507－73）著『5柱式の法則』はヴェネツィア刊（1603），ローマ刊（1617）及び出版地なし（刊年なし）と3点のイタリア語版，ニュルンベルク刊独語版（1699），アムステルダム刊オランダ語版（刊年なし），アムステルダム（?）刊仏語版（1610）及び露訳写本（1720年代，ブリュース旧蔵書），ローマ刊イタリア語版（1617）からの露訳刊本初版（1709），第2版（1712），第3版（1722）と10点に及ぶ。16世紀イタリアの建築家・古代史研究家A.パラーディオ（1508－80）の著作はヴェネツィア刊『建築の四書』（1570，伊）ほか2点，イタリア・ルネサンス後期の建築家V.スカモッツィ（1552－1616）の著作はヴェネツィア刊『普遍的建築の概念』（1694，伊）ほか2点。フランスの建築家D.モロ著パリ刊『モロの建築（全2巻）』（刊年なし，仏）ほか1点もある。ピョートルは数ある宮殿の中でもとりわけ1717年に訪れたことのあるヴェルサイユ宮殿が気に入っており，同宮殿に関する著作は4点（うち2点は大型本）ある。

庭園17点18（露1）冊。庭園の分野にもヴェルサイユ宮殿に関するものがアムステルダム刊『ヴェルサイユの迷路』（刊年なし，仏・英・独・蘭），A.フェリビアン著パリ刊『ヴェルサイユの洞窟の描写』（1679，仏），A.ル・ポートル著写本『ヴェルサイユ，トリアノン等の庭園の設計図集』（1711，仏），出版地不明のJ.-U.クラウセン著『ヴェルサイユの洞窟の描写』（刊年なし，仏・独）と4点含まれている。その他にH.ヘッセン著『ドイツの園丁（全2巻）』（1710，独）。これらの著作は上記の建築書及び噴水造りの工学書とともに宮殿及び庭園造りにおおいに活用されている。ペテルブルグ西方約25kmのフィンランド湾に面したペテルゴーフ（現ペトロドヴァレーツ）は今も当時のたたずまいを伝えている。

歴史108点148（露51）冊。歴史はピョートルが幼少時から最も興味を持っていた分野である。フランス王室印刷所で刊行された全紙の大型本『ビザンチン史集成（全36巻）』(1645－1712，羅）は「ピョートル蔵書」の中で最も大部のもので，1717年にレベトニコフがフランスから運んできた（文献6，p.168)。これ以外にもまとまったものとしてはR.Q.クルティウス著『アレクサンドロス大王の偉業』（1670，羅）とその露訳写本（18世紀第1四半期）及び露訳刊本初版（1709），第2版（1711），第5版（1724），ラテン語版から露訳された『フリギヤ王国トロイの崩壊』初版（1709），第2版（1712），第3版（1717），S.プッフェンドルフ著『ヨーロッパ史序説』（1704，羅）はピョートルの命により露訳された刊本初版（1718）及び第2版（1723），同じ著者の『ヨーロッパ各国史序説（全4巻）』（1699－1709，仏）ほか2点などがある。その他にC.M.コロンナ著ローマ刊『マルクス・アウレリウス伝』（1704，羅），ビザンチン史3点，コンスタンチノープル史1点，タキトゥスの著作が『年代記』ほか1点，シーザーの著作3点，ローマ史，年代記5点など。ロシア語の絵入り写

本で通称『モスクワ歴史百科』は16世紀に作成された「イワン雷帝旧蔵書」と見なされている。同書には二つの興味深い書き込みがある。ひとつは総主教ニーコンが1661年に「この本を持ち去ったものは破門に処す」との威嚇の言葉と共にボスクレセンスキィ修道院に寄進したことについて，もうひとつは1724年8月に書かれたもので，ピョートルの娘ナターリヤ誕生を記念して「夏の宮殿」においてピョートルの手から同書を（誰かが）受け取ったことについて。誰が受け取ったかは不明だが，後年没収されたオステルマンの旧蔵書と共に科学アカデミー図書館が同書を受入れている（文献6，p.91,96－97）。ロシア語写本の『ラジヴィル年代記』（1717年以前）はピョートルの命によりケーニヒスベルクの王立図書館に赴いて複写されたものである。ところが『ラジヴィル年代記』の原本はプロシャに対する7年戦争に参戦したロシア軍が，ケーニヒスベルクを占領していた間に持ち去り，1761年に科学アカデミー図書館が受入れて現在も所蔵するところとなっている。同書は1994年にペテルブルグ＝モスクワでファクシミリ版が出版されている。ロシア語刊本ではまずインノケンティ・ギゼーリ著『シノプシス』のキエフ版第2版（1678），第3版（1680），第4版（1700頃），モスクワ版第2版（1714），ペテルブルグ版初版（1718）がある。同書は長い間唯一のロシア史の教科書として使われ，18世紀に入ってからも8回出版されている。その他にカザン汗国史2点，ノヴゴロド史，年代記3点など。

言語学・辞典33点37（露11）冊。16点19冊は旧蔵者がある。文法書はロシア語版写本『フランス語文法』（18世紀第1四半期），W.セーウェル著アムステルダム刊『オランダ語文法』（1712,蘭），N.フィルシン著フランクフルト刊『ラテン語文法』（1609，羅，ヴィニウス旧蔵書），M.J.レニウス著『ラテン語文法』（出版地・刊年なし,羅,ブリュース旧蔵書）など。辞典はL.ヒュルシウス編ニュルンベルク刊『仏・独／独・仏辞典』（1602),S.カルヴィシウス著ローテンブルク刊『羅・独辞典』(1652)，T.スピエセルス編バーゼル刊『羅・独／独・羅辞典（全2巻)』（1716），L.マイヤー編アムステルダム刊『オランダ語辞典（全2巻)』（1658，ヴィニウス旧蔵書）及び同（全3巻）（1688，ヴィニウス旧蔵書),アムステルダム刊『露・羅・独辞典』第2版（1700，独）とコピエフスキィによる露訳刊本初版（1700，ナターリヤ旧蔵書）及び第2版（1700,ナターリヤ旧蔵書），ポリカルポフ編『スラブ・ギリシャ・ラテン語辞典』（1701）など。ブリュースは1716年7月に前掲のセーウェル著『オランダ語文法』の露訳作業に取りかかり1717年11月に露訳刊本が50部出版されている。1717年になってブリュースはピョートルがオランダに出かける事を聞かされるが刊行が9月以降になる見込みのため，旅行での必要性の判断から文法書の一部分である「ロシア語・オランダ語の語彙集」（42部）を4月1日に，また「オランダ語・ロシア語の語彙集」（49部）を4月半ばに印刷させている。これらはブリュース編『露・蘭辞典』及び『蘭・露辞典』と呼ばれている。ただし『露・蘭辞典』は『ピョートル蔵書目録』には含まれていない。

政治・外交37点44（露15）冊。この分野はピョートル時代の国内外の緊張が特にロシア

語の文献にそのまま反映している。外国語の文献ではJ.ニゥホフ著アムステルダム刊『大タタール汗への東インド会社使節』(1683, 蘭), 同じく『大タタール汗へのバタヴィア使節』(1668, 羅), ニュルンベルク刊『ドイツの官房』(1661, 独, ブリュース旧蔵書), ニュルンベルク刊『ニスタット和平の鍵』(1722, 独) その他がある。ロシア語に翻訳された文献では, フランス語からの露訳でペテルブルグ刊『平和への発露とイギリスのジブラルタル統治の重要性についての考察』(1720), 英語版からアムステルダムでフランス語抄訳が刊行されたJ.ロビンソン著『スウェーデンの現状と王国史の概略』(1720) と露訳写本 (18世紀), J.-L.ゴットフリート著フランクフルト刊『政治辞典 (全8巻)』(1627-31,独) とその一部分の露訳写本『教訓的格言と紋章の説明：テキスト付版画412枚』がある。ロシア語の刊本には重要課題が多く,『1704年ロシア・ポーランド条約』(1707), モスクワ刊『トルコ王による背信的和平破棄に関する1711年2月22日の宣言』(1711),『1718年2月3日付アレクセイの王位継承権剥奪宣言』(1718), ペテルブルグ刊『ニスタット条約締結』(1721) 及び第2版 (1721), フェオファン・プロコポーヴィチ著ペテルブルグ刊『世俗と教会の権力関係の史的研究』(1721), 同じくフェオファン・プロコポーヴィチ著モスクワ刊『王位継承者決定に関する君主の意志の真実』第2版 (1722),『君主, 継承者への聖職者の誓い』(1722), ペテルブルグ刊『1724年5月7日エカテリーナ1世戴冠式の記述』(1724) 及び同書のベルリン刊ドイツ語版 (刊年なし) などがある。

法律75点76 (露50) 冊。海軍関連24点, 軍事関連16点を含み, ロシア語文献にはピョートルの改革に伴う軍事組織及び国家機構整備を進めるため繰り返し出版された法令, 条例, 規則等が目立つ。外国語の文献にはフランクフルト刊『戦争規定』(1672,独・仏), ハーグ刊『歩哨規則』(1688, 蘭), 同『民兵訓練規則』(1688, 蘭), スウェーデン語の写本『要塞司令官への通達』(1690), フランクフルト刊『カルル4世の金印憲章 (詔勅)』(1711, 独), ハーグ刊『フランス国王の陸軍法』(1711, 仏), ドイツ語訳写本『アレクセイの法典』(1717, パウゼ旧蔵書) などがある。外国語の文献及びロシア語訳には『ルイ14世の海軍及び海軍工廠に関する勅令』3点 (1681, 1687, 1689, 仏) と1687年版からの露訳刊本 (1715), イタリア語から露訳された写本『ソロモン王の判決集』, 露訳写本『1662年イギリス海軍省規則』(18世紀初頭), ウィルヘム・オランイェ (ウィルヘルム・オレンジ) 公著ハーグ刊『海軍の良い訓練の所見のために』(1674,蘭) とその露訳刊本,『オランダ海軍の指令及び法令』初版 (1714), 第2版 (1714), 第3版 (刊年なし), また露訳写本に『オランダ及びイギリス海軍操典』『スウェーデン海軍操典』(いずれも18世紀第1四半期) など。ロシア語文献にはまず第1にアレクセイの死の前日1718年6月25日付けで刊行された『皇太子アレクセイに関する予審と判決の全国民への布告』がある。同書は1718年のうちにフランスのナンシーで仏語訳が刊行されている。その他時代順に主要なものを列挙するとモスクワ刊では『ロシア海軍への通達と法令』初版 (1710), 第2版 (1710), 第3版 (1710),

第5版（1714），『連隊全体への勅令』第2版（1717），『皇位継承についての規定』（1722），『武官，文官，廷臣の官等表』（1722）ほか。ペテルブルグの刊行では『将軍，各階級の軍事義務規定』（1716）及び増補第5版（1719），『軍制条例』第3版（1717），第4版（1717），『海上の艦隊指揮の海軍規定』初版（1720），第2版（1720），第4版（1722），第6版（1724，露・蘭），『1720年2月27日付参議会制定規則』初版（1720）及び改定第2版（1720），『海軍参議会に関する規定』（1722），『1722年2月23日付聖職参議会規定』第2版（1722），『港に停泊時の海軍規則』（1722），『森林監督長への通達』（1723），『食糧官への通達』初版（1724），『1724年1月31日付通商規則』（1724），『ロシア諸港に来港する外国の貿易船船長他に関する規定』の露・英版（1721），露・伊版（1721），露・蘭版（1724）など。

経済12点12（露9）冊。経済に関する文献は11点で外国語文献も3点と少ないが，1717年のフランス旅行を反映してパリ刊『フランス国王（ルイ15世）により1718年5月に沿岸諸都市（リューベック，ブレーメン，ハンブルク）との間で締結された通商条約』（1718，仏）と英語版からフランス語に翻訳されたジョン・ロー著ハーグ刊『通貨と貿易』（1720，マカーロフ横領本）がある。前者は1720年代に，後者は1720年にそれぞれ露訳写本が作成されている。もう1点の外国語文献はモスクワその他での商業活動を詳細に記述したP.-J.マールペルガー著リューベック刊『モスクワ商人』（1705，独）。上記2点以外のロシア語文献7点のうち6点は写本で，刊本は1点のみ。写本にはまずモスクワ時代に属する『ノヴォジェヴィチ修道院世襲領地人口調査簿及び収入についての抄本』（17世紀末）がある。同書にはモスクワ，ウラジーミル，ゴロジェーツ，シンビルスク及びその他の郡の諸村からのノヴォジェヴィチ修道院の収入に関する次のような資料が含まれている：第1に土地，製粉所，鍛冶場，商店からの年貢の貨幣量，第2に穀物及び魚，肉，卵，食用油その他の食卓用備蓄量，第3に綿の平織布地，麻布，薪などの量について（文献6，p.43）。『リフリャンジヤ（17－20世紀初頭の北部ラトヴィア及び南部エストニアの公式名称，ドイツ語名Livland）のエゼリ島（現サーレマー島）における公共及び小地主貴族階級の土地の収入，その地で任官される全官等の俸給，リガ及びディナメントの城塞の守備隊と砲兵の状態に関する書』（1713－1714）は，1708年にスウェーデンに勝利したロシアが支配地域をバルト海沿岸にまで拡大しエストニアの首都レーヴェリ（現ターリン）を，さらに1710年にラトヴィアのリガを手中に収めた後，新たな状況に即応して作成されたもの。その他にスウェーデン語の刊本（原本不詳）から露訳された『輸入品に対する関税率』（1715），イワン・チャーシニコフがピョートルに対して報告した『定額税，非定額税，及びペテルブルグの食糧円滑供給に関する試案』（1717），『商業参議会関係の税率（ロシア諸港での輸出入品に対する）』（18世紀第1四半期の写本から1721年に複写），『1724年1月31日付商業参議会規定』（1724－1725）がある。刊本1点はペテルブルグ刊『ペテルブルグ，ヴイボルグ，ナルヴァ，アルハンゲリスク，コラ各港の税率』（1724）。

なお，ピョートル改革の支持者であるポソシコーフがピョートルへの献辞を添えて自ら1724年に完成した写本『貧富の書』を献上するためマカーロフに手紙を書き，官房に彼を2度訪問しているが，願いも空しく同書はピョートルのもとに達することはなかった。ポソシコーフはピョートルが世を去った7ヶ月後の1725年8月に逮捕・投獄され，翌1726年に没している。『貧富の書』についての初めての言及はロモノーソフから受け取った同書を1752年に科学アカデミー図書館が複写したとの記録である（文献6，p.446)。ロモノーソフが入手した経緯と時期についての言及はない。『貧富の書』は1812年に初めて印刷されたが，この著作と著書が広く知られるようになるのは1842年以降である。したがってピョートルの時代には『貧富の書』はその存在すら知らされず，同書がピョートルの改革に影響を与えたり，その内容が政策論議の対象となることはなかったものと考えられる。『貧富の書』は当然のことながら『ピョートル蔵書目録』には含まれていない。

農業・菜園5点7（露2／3）冊。アガピィ・クリツキィ著『農業の書』（アレクセイ旧蔵書）は1674年ヴェネツィア刊の農業書（原著不詳）をノヴゴロドのソフィヤ大聖堂で翻訳したもの。アレクセイは自分の所領で農業に携わっており，その彼のために1716年2月7日にノブゴロドから送られてきた（文献6，p.138)。W.H.von ホーフベルク著『貴族の所領と田園生活（全2巻)』(1701，独，アレクセイ旧蔵書）には露訳写本（年代不明）があるがこの写本はピョートルの指示により翻訳されたもので，ピョートルがアレクセイの旧蔵書を利用した具体例として注目に値する。

文学104点106（露67／68）冊。外国語の文献で著名な作品は『千夜一夜物語』がアムステルダム刊第3版（1699，仏）及びライプツィヒ刊（1711，独，アレクセイ旧蔵書）の2点，アムステルダム刊『ギリシャ神話』(1669，羅)，アムステルダム刊『イソップ寓話』(1672，ギ・羅，アレクセイ旧蔵書）とその露訳刊本『イソップ寓話』(1712，ナターリヤ旧蔵書)，ローマの詩人オヴィディウス（紀元前43－後13頃）が神話を題材とした全15巻の代表作『変身譜』のアムステルダム刊（1702，羅・仏)，ニュルンベルク刊（刊年なし，羅・独)，アウグスブルク刊（刊年なし，独）とその露訳刊本（1722)，第1－8巻をポーランド語訳から2巻物にまとめた露訳写本（18世紀第1四半期）の5点，ラ・フォンテーヌ著アムステルダム刊『風流譚（全2巻)』(1696，仏，アレクセイ旧蔵書）など。ロシア語の写本，刊本は大部分が頌詞または頌詩で，その他に凱旋の祝賀パレード，花火等を描いたもの，世俗的テーマによる説教等が含まれている。露訳写本にエラスムス著『痴愚神礼讃』（年代不明）がある。

読本24点24（露15）冊。外国語刊本にニュルンベルク刊『図入りA.B.C.』（独)，ペテルブルグ刊『ドイツ語書き言葉のA.B.C.』(1724)，エラスムス著 ハーグ刊『対話（文学，修辞学等)』(1700，羅，ブリュース旧蔵書）とペテルブルグ刊露訳（1716)，コメニウス著『世界図絵』のブレスラウ刊（1667，羅・仏・独・ポ）及びニュルンベルク刊（1698，羅・

独）など。

日時計4点（露なし）。J.ガウヘン著リンダウ刊『日時計の図』（1708，独），同著アウグスブルク刊『日時計』（1711，独）他2点。ピョートルの執務室には金属製の環状日時計が残されている。これは公園などで見かける地面に固定された日時計とは違い，持ち運びが出来るものである（文献19，p.166－167）。すでに1673年にパリにおいてC.ホイヘンス著『振子時計』（羅）が刊行されているが「ピョートル蔵書」には含まれていない。

宗教434点471（露369／372）冊。教会暦16（露16）点。宗教のうち203点210冊はナターリヤ（121点122冊），アレクセイ（65点70冊）ほかの旧蔵書。外国語書籍には，『ラテン語聖書』（出版地,刊年なし）をはじめ『新約聖書』はマルチン・ルター訳ベルリン刊ドイツ語版（1707），ローザンヌ刊ラテン語版（1556，医薬庁文庫），モーン刊フランス語版（1697，アレクセイ旧蔵書），ハーグ刊オランダ語版（1717，ブリュース旧蔵書），ハンブルク刊ドイツ語版（1717,アレクセイ旧蔵書）の各版，旧約聖書外典，ハンブルク刊『新約聖書外典』（1710,独,ブリュース旧蔵書），アウグスブルク刊『史的絵入り聖書（全5巻）』（1702，独），フランクフルト刊『ヒエロニムス全集（全4巻）』（1684，羅），イタリアの教会史家C.バロニウスの著作3点などがある。『コーラン』もパリ刊フランス語1672年版と1674年版，後者からのペテルブルグ刊露訳（1716）の3点がある。ロシア語書籍は3つのグループに大別でき，奉神礼書146点146冊，神学140点140冊，聖者伝をはじめとする宗教的主題の読み物及び教会史83点84冊。古儀式派・分離派に関するものは8点。

美術18（露2）点。ピョートルはアムステルダムで代理人を通じて特に1715－1721年の間に多数の絵画を購入している（文献18，p.196）。しかし美術の書籍は18点である。この18点にはイタリア前期ルネサンスの建築家・画家・彫刻家・音楽家であるL.-B.アルベルティ著アムステルダム刊『絵画論』（1649，羅），絵画論，彫刻，銅版画集などの書籍の他に，ピョートル自身の手による楕円形の銅版画（縦21×横16.5cm）1枚が含まれている。これはアムステルダム滞在中の1698年に弟子入りした銅版画家シホーネベークの指導の下に制作したもの。図柄は左手に持った十字架を高く掲げた天使がイスラム教徒のシンボルである半月，半月旗，槍その他を踏み敷いている。1696年にピョートルがトルコとの戦いに勝利したアゾフ占領を比喩的に描いた作品で『イスラム教徒に対するキリスト教徒の勝利』と題したもの。銅版画の技術としてはごく初歩的なものだが「反トルコ同盟」の結成を大使節団の主要な外交目的としていたピョートルの思いだけは十分に伝わってくる。J.ヴィルデ著アムステルダム刊『ヤコブ・ヴィルデ博物館蔵古代彫刻』（1700，羅）はヤコブ・ヴィルデ博物館の所有者である著者から『ヤコブ・ヴィルデ博物館蔵古銭コレクション』（1692，羅）及び『ヤコブ・ヴィルデ博物館蔵カメオ・コレクション』（1703，羅）と共にピョートルに贈られ1717年にレベドニコフが持ち帰ったもの（文献6，p.165－166）。

哲学10点14（露2）冊。エピクテートス著ロンドン刊『提要』（1659，ギ・羅）及びそ

の露訳写本（年代不明）がある。

その他34点42冊（露５）。まとまったものはないがピョートルの関心の幅広さを物語っていて興味深い。フランスの建築家D.マロ著アムステルダム刊『カバー，刺繍，組み紐の新しい本』（年代なし，仏）をはじめ，製版技術，金細工，騎乗，狩猟，剣術，園芸，修辞学，ドイツ語の文例集などさまざまである。貴族ピョートル・ミハイロフ名（ピョートルの偽名）のパスポートがロシア語写本に分類されている。

〔表１〕ルッポフの分類に対応した分野別一覧表

言語 / 分野	ロシア語		外国語		合計	備考
	写本	刊本	写本	刊本	点/冊	主な外国語：点数/冊数
1. 海軍	4	20	1	8/13	33/38	蘭3, 仏2/6, 独1, 羅1, 英1
航海・海事	2	4	1	23/27	30/34	仏11/12, 蘭7/8, 英2/4, ス2, 独1
＊河川航行	0	2	0	2	4/4	仏2
造船	5	3	2	12/14	22/24	蘭8/9, 仏3/4, 英2, 4言語1
2. 築城	8	9	4	64/95	85/116	独30/40, 仏20/30, 羅9/20, 蘭6
砲術	5	5	7	21/39	38/56	独19/33, 仏6/9, 蘭2/3, ス1
軍事	10	10	9	28/48	57/77	独15/17, 仏10/28, 蘭4, 羅4
3. 工学	3	0	1	20/21	24/25	独10/11, 仏3, 羅3, 蘭1, 伊1
4. 数学	4	9	6	38/47	57/66	独17/21, 仏10/13, 羅8/9, 蘭5/6
物・力・光学	5	0	1	9	15/15	羅4, 仏3, 独2, 独・仏1
化学	2	0	0	4/6	6/8	独3/5, 仏１
5. 地理学	6	5	1	30/46	42/58	羅11/18, 仏8/10, 独6, 蘭5/12, 英1
地誌	0	0	3	39/68	42/71	蘭17/18, 独13, 仏8/22, 羅2/16, ス1
地図	0	1	1/3	28/40	30/44	仏14/16, 蘭11/21, 羅3, 英1/3
天文・宇宙学	2	2	0	6/21	10/25	独2/7, 羅2, 蘭1/11, 仏1
6. 博物学	1	0	4	2/3	7/8	羅3, 蘭2/3, 独1
医・薬・獣医学	3	0	0	10/11	13/14	独5, 羅4/5, 羅・独１
＊解剖学	0	0	1	6	7/7	独2, 羅2, 蘭2, 英1
7. 建築	3	3	2	101/133	109/141	仏34/40, 独29/43, 伊20/25, 蘭10/13
庭園	0	1	6	10/11	17/18	伊6, 独4, 仏4, 独・仏1, 蘭1
8. 歴史	28	23	1	56/96	108/148	羅25/61, 独13, 羅・ギ6, 仏6/10, 伊5
系譜・紋章学	1	2	1	9/12	13/16	羅6, 独2/5, 仏2
9. 言語・辞典	4	7	0	22/26	33/37	仏6, 羅5, 蘭4/7, 独3, 独・仏3
10. 政治・外交	4	11	2	22/29	37/44	独14/21, 仏5, 羅2, 蘭1
11. 書簡形式	1	2	0	5	8/8	独3, 羅1, 仏・独1
12. 法律	9	41	3	22/23	75/76	蘭7/8, 独7, 仏7, 羅2, 独・仏1, ス1
経済	8	1	0	3	12/12	仏2, 独1
＊農業・菜園	2/3	0	0	3/4	5/7	仏2, 独1/2
13. 雑誌	0	0	0	1/11	1/11	独1/11
14. 文学	31/32	36	2	35/36	104/106	独11, 羅8, 仏7/8, 蘭4, ポ4, ギ・羅1
15. 暦	12	5	0	8	25/25	独7, 羅1
読本	1	14	0	9	24/24	独4, 羅2, 羅・独1, 羅・ギ1
音楽	2	3	1	0	6/6	独１
＊日時計	0	0	1	3	4/4	独2, 羅1, 羅・英・露1
その他	4	1	4	25/33	34/42	独17/20, 仏5/8, 蘭4, 羅3/5

16. 宗教	117/119	252/253	1	64/103	434/471	独29/41, 羅16/34, 蘭8/9, 羅・ギ5/7
＊教会暦	0	16	0	0	16/16	
17. 分野不明	2	2	1	37/39	42/44	独16/17, 羅13/14, 蘭5, 仏4
＊美術	2	0	1	15	18/18	羅6, 仏4, 独3, 蘭2, 伊1
＊図像学	0	0	0	6/8	6/8	羅3, 独1/2, 仏1/2, 蘭1
＊哲学	2	0	0	8/12	10/14	羅4/8, 独3, 羅・ギ1
合計	293 /297	490 /491	68 /72	812 /1135	1663 /1986	

〔参考〕ルッポフによる1621冊の分野別冊数（文献12, p.170）

① 202 ②166 ③38 ④48 ⑤143 ⑥15 ⑦109 ⑧149 ⑨19 ⑩19 ⑪26 ⑫24 ⑬10 ⑭65 ⑮39 ⑯457 ⑰92：＊印はルッポフの分類にない項目

第8節　言語別 …… ルッポフ研究との比較

『ピョートル蔵書目録』1663点（1981冊）全点を言語別に見ると次の通りである。なお，〔　〕カッコ内にルッポフが『譲渡目録』をもとに分析した数字を示すが（文献12, p.175），現物確認の度合いの違い，さらには基礎数字が1621冊と少ないうえに201冊が言語不明とされているので 両者の数字にはかなりの差がある。

ロシア語（及び教会スラブ語）783点788冊〔847冊〕には露・蘭対訳18点をはじめとする外国語との対訳29点を含む。ドイツ語299点390冊〔144冊〕。フランス語195点269冊〔151冊〕。ラテン語161点257冊〔69冊〕。オランダ語122点163冊〔102冊〕。イタリア語37点42冊〔26冊〕。英語11点16冊〔15冊〕。ポーランド語7点7冊〔45冊〕。スウェーデン語7点7冊〔4冊〕。2言語35点40冊〔35冊〕の中にラテン語・ギリシャ語対訳17点19冊，仏・独対訳8点，羅・独対訳5点などがある。3言語以上の多言語は6点7冊〔8冊〕。言語不明0冊〔201冊〕。ルッポフの一覧表にあるギリシャ語12冊は対訳のものであり，フィンランド語及びアルメニア語各1冊は確認できない。

ロシア語書籍は主に宗教と世俗的内容の出版物の比率を見ることにより，この時代の出版活動の変化を読み取ることが出来る。783点788冊のうち宗教が369点372冊で47.1％を占める。ただし前述の通りナターリヤ旧蔵書122冊及びアレクセイ旧蔵書18冊を含む。写本は制作年代が明らかな17世紀末までの116冊のうち宗教は63冊で54.3％，18世紀は138冊中34冊で24.6％。刊本は出版地別に見るとこの比率の違いがより明瞭になる。

モスクワの出版物は222点223冊中121点122冊，54.5％が宗教で，さらに教会暦が12点ある。これを時代別に見ると17世紀末までは宗教が77点中65点と84.4％を占めているが，1701～1724年は147点148冊中50点51冊，34.5％と大幅に減少している。

1703年から建設され1712年にモスクワから遷都したペテルブルグでの出版は当然のこと

ながらすべて18世紀である。宗教は119点中14点と11.1%で教会暦も2点あるが，世俗的内容の出版物が90%近くを占めている。

こうした比率の変化はピョートルが実施した文字改革に伴って1708年に開始された，世俗文字による，主として世俗的内容の出版活動の反映である。ピョートルの在位中にモスクワとペテルブルグにおいて約880点が刊行されている（文献15，p.67－480）。

ロシアでのキリル文字による出版活動は文字改革後も宗教に限定してモスクワを中心に続けられ，ピョートル在位中に約120点（文献16，p.152－273），ピョートル以後18世紀末までに約1,300点が刊行されている（文献25，p.70－527）。出版部数に関しては正確な資料がないので比較は出来ないが，出版点数では17世紀の約3倍に増加している。したがって文字改革により教会が若い世代との接点を絶たれてしまったと考えるのは早計である。

ロシア国内の刊本にはその他にモスクワの北西約300kmのヴァルダイで刊行された2点が含まれている。これらはツァーリ・アレクセイとの意見の対立からヴァルダイのヴォスクレセンスキィ修道院に引きこもった総主教ニーコンが自らの印刷所で刊行した4点と1枚物1点のうちの『思い描く楽園：第一部』(1658) と『心の糧』(1661) である。

ロシア以外で出版されたキリル文字による書物は，ポーランドが受入れていたカトリックへの傾斜があるとの警戒心からロシア正教会がロシアへの持ち込みを厳しく制限していた。しかしながら「ピョートル蔵書」にはキエフ61，チェルニーゴフ25，ノヴゴロド・セーヴェルスキィ2，リヴォフ9，オストローク2，ウネフ2，ポチャーエフ2（以上ウクライナ），モギリョーフ6，クテイン1（以上ベラルーシ），ヴィルナ7点と数多く含まれている。合計115点中94点，81.7%が宗教。この他にストックホルム1，アムステルダム10点（うち9点が世俗的内容）がある。アムステルダムでのロシア語の出版は，大使節団で訪欧した後にピョートルがオランダの出版者ヤン・テシングに特許状を与えたことによる。

〔表2〕ロシア語 年代・出版地・分野別一覧表

	合計	～1700	1701～	刊年不明
写本	293/297	宗117, 文30, 歴28, 暦12, 軍10, 築8, 砲5, 地理6, 造船5, 物5, 数4, 工3, 法9, 経8, 政4, 言4, 医3,		
モスクワ	222/223	宗66, 文3, 読3, 数, 軍, 法, 歴各1	宗教55, 文14, 歴9, 築8, 砲5, 軍4 法8, 政6, 読6,	宗5, 音1
ペテルブルグ	134		法35, 文21, 宗16, 海軍18, 航3, 造船2, 政5, 読5, 暦4, 軍3, 言3, 数2	法1
キエフ	61	宗教29，歴史3	宗教28	宗教1
チェルニーゴフ	25	宗教11，文学1	宗教11，文学2	
アムステルダム	10	言2, 天文, 数, 軍, 歴, 文各1	航海1，教会暦1，紋章学1	
ヴィルナ	7	宗教5	（軍事1）	宗教1
リヴォフ	7	宗教6，読本1		

外国語書籍を言語別に見ると，ピョートルの興味と言語の得手，不得手がそのまま反映

している。分野別は5点以上まとまっているものを中心にふれる。

ドイツ語は写本33点を含む299点390冊。また，アレクセイ49点62冊，ブリュース17点20冊，ヴィニウス5点，パウゼ3点，アレスキン2点の旧蔵書を含む。築城30点40冊，砲術19点33冊，軍事15点17冊，建築29点43冊，数学17点21冊，工学10点11冊，法律7点，政治14点21冊，歴史13点，文学11点，地理6点，ロシアについての記述がある旅行記6点を含む地誌13点，暦7点ほか。宗教は29点41冊で，アレクセイ蔵書11点13冊，ブリュース蔵書3点4冊を含む。主な出版地だけでもニュルンベルグ38点56冊，アウグスブルク25点34冊，フランクフルト23点36冊，ライプツィヒ15点19冊，ハンブルグ14点18冊，アムステルダム10点12冊，ケルン7点8冊で，その他20都市以上にまたがる。なお，ペテルブルグの9点もある。

フランス語は写本6点を含む195点269冊。分野別では建築34点40冊及び庭園4点（ヴェルサイユに関しては，階段，迷路，洞窟を含む6点がある），地理8点10冊，地誌8点22冊，地図14点16冊，海軍2点6冊，航海・海事11点12冊（河川航行2点），築城20点30冊，砲術6点9冊，軍事10点28冊，数学10点13冊，法律7点，政治5点，文学7点8冊，言語6点，歴史6点10冊ほか。宗教は仏語訳コーランを含む4点5冊。出版地はパリ75点97冊，アムステルダム54点88冊。その他はハーグ12点13冊，リヨン3点7冊，ライデン3点10冊，フランクフルト3点6冊，ロンドン3点4冊，ユトレヒト，ベルリン各3点など。

ラテン語は写本8点を含む161点257冊。医薬庁8点13冊，アレクセイ6点7冊，ブリュース5点，ヴィニウス1点の旧蔵書を含む。分野別ではフランス王室印刷所刊行の『ビザンチン史集成（全36巻）』を含む歴史25点61冊が最も多く，地理11点18冊，地誌2点16冊，築城9点20冊が続く。その他に建築7点8冊，ニュートン著『自然哲学の数学的原理』（ブリュース旧蔵書）を含む数学8点9冊，医学・薬学・解剖学4点5冊，紋章学・系譜学6点，美術6点，文学8点，言語5点など。宗教は16点34冊。

オランダ語は写本4点を含む122点163冊。分野別では，モスクワについての記述がある旅行記4点を含む地誌17点18冊，地図11点21冊，地理5点12冊，造船8点9冊，航海・海事7点8冊，海軍3点が特徴的。築城6点，軍事4点，建築10点13冊，数学5点6冊，法律7点8冊などもある。宗教は8点9冊のみ。その他で特徴的なのは銅版画集2点3冊及び製版技術1点。出版活動が盛んだったアムステルダムでの刊行が85点123冊を占める。他にハーグ10点11冊，レーワルデン3点，ロッテルダム2点3冊，ハールレム，ケルン各2点など。

イタリア語は写本5点を含む37点42冊。分野別は建築20点25冊，庭園6点，歴史5点その他で，宗教は1点のみ。出版地はローマ15点20冊，ヴェネツィア8点ほか。

英語は11点16冊。写本3点6冊は『アメリカ沿岸地図：全3巻』（17世紀），『海軍の教育』（1661－68），『イギリス軍艦船のサイズ一覧』（1695）。刊本8点11冊は数学2，航海・海事2，造船，解剖学，建築，地理各1点で，出版地はすべてロンドン。

ポーランド語は7点7冊。文学4，歴史，宗教，地理各1点。

スウェーデン語7点7冊。写本4点，刊本3点とスウェーデンの文献は少ない。写本には『砲術のための短い規則』(17世紀末)，『要塞司令官への通達（服務規定)』(1690）ほか築城，軍事各1点がある。刊本のJ.モンサン著ストックホルム刊『バルト海での必要な航海の書』(1677）は1721年に露訳刊本がペテルブルグで出版されている。その他にN.ウィクセル著ストックホルム刊『ロシアに関する記述』(1706）及び航海・海事1点がある。カルル12世（在位1697－1718）が君臨したスウェーデンは北方に位置する当時の最大・最強の敵であったが，ピョートルにとって文化や技術を学び取る対象ではなかった。

2言語の主なものを見るとラテン・ギリシャ語が17点19冊で最も多く，分野別で歴史6点，宗教5点7冊，文学，数学，哲学，軍事，読本，分野不明各1点。フランス・ドイツ語は7点で，分野別では言語3，築城，庭園，物理，書簡各1点。ラテン・ドイツ語は5点7冊で，文学2点，言語1点2冊，建築1点2冊，読本1点。

〔表3〕言語別・年代別一覧表（ルッポフの研究との比較）

言語		ピョートル蔵書目録								ルッポフの冊数
		写本（点/冊数）				刊本（点/冊数）			合計	
		－1700	17-18	1701－	不明	－1700	1701－	不明	点/冊数	
ロシア		116/117	8/10	139	30/31	160	306/307	24	783/788	847
ドイツ		9	1	23	0	113/149	107 / 146	46/62	299/390	144
フランス		2	1	3	0	88/119	62/91	39/53	195/269	151
ラテン		2	2	4	0	105/193	28/32	21/24	161/257	69
オランダ		1	1	2	0	66/86	37/57	15/16	122/163	102
イタリア		0	0	5	0	20/23	2/4	10	37/42	26
英語		3/5	0	0	0	6/8	2/3	0	11/16	15
ポーランド		0	0	1	0	4	2	0	7/7	45
スウェーデン		3	0	1	0	1	1	1	7/7	4
ギリシャ		0	0	0	0	0	0	0	0	12
フィンランド		0	0	0	0	0	0	0	0	1
アルメニア		0	0	0	0	0	0	0	0	1
2言語		0	1	0	0	24/26	6/8	4/5	35/40	35
多言語		0	0	3	0	1	1/2	1	6/7	8
不明		0	0	0	0	0	0	0	0	201
合計	点数	136	14	181	30	588	553	160	1663	1621
	冊数	139	16	181	31	770	653	196	1986	

〔表4〕言語別・分野別一覧表

言語	合計	主な分野
ドイツ語	299/390	建29/43，宗28/41，築城30/40，砲19/33，軍15/17，地理・誌19，数17/21，文11，工10/11，政14/21，歴13，法7，暦7，医・薬5，化3/5，庭4，哲3.
フランス語	195/269	建34/40，庭4，築城20/30，砲6/9，軍10/28，地理8/10，地誌8/22，地図14/16，航11/12，数10/13，法7，歴6/10，砲6/9，文7/8，政5，言5.
ラテン語	161/257	歴25/61，宗16/34，地理・誌13/34，地図3，築城9/20，建7/8，数8/9，文8，物理・光学4，美術6，紋章学6，言5，軍4，哲4/8，医・薬4/5，解剖2.
オランダ語	122/163	地理・誌22/30，地図11/21，海軍3，航7/8，造船8/9，建10/13，築城6，数5/6，法7/8，宗8/9，言4/7.
イタリア語	37/42	建20/25，庭6，歴5，築城，軍，数，工，美術，宗教各1.

〔表5〕外国語刊本言語別・出版地別一覧表 （点数/冊数）

言語	合計	主な出版地
ドイツ語	266/357	ニュルンベルク38/56，フランクフルト23/36，アウグスブルク25/34，ライプツィヒ15/19，ハンブルク14/18，アムステルダム10/12，ケルン 7/8
フランス語	189/263	パリ75/97，アムステルダム54/88，ハーグ12/13，ライデン3/10，リヨン3/7，フランクフルト3/6，ロンドン3/4，ユトレヒト 3，ベルリン 3
ラテン語	153/249	アムステルダム29/34，フランクフルト17/34，ローマ13/14，パリ7/8，ハーグ7，ヴェネツィア6/10，アントワープ5，ニュルンベルク 4，ロンドン 2
オランダ語	118/159	アムステルダム85/123，ハーグ10/11，レーワルデン3，ロッテルダム2/3，ハールレム2，ケルン2，モスクワ 3
イタリア語	32/37	ローマ15/20，ヴェネツィア8，フィレンツェ1，ボローニャ1，ジェノヴァ1，ニュルンベルク1，アウグスブルク1，ペーサロ 1

以上で「ピョートル蔵書」そのものについての分析は終え，第9節では「ピョートル蔵書」が17－18世紀の個人蔵書の中でどのような位置を占めていたかを明らかにする。つづく第10節では17－18世紀ロシアの出版活動全体を概観しピョートルがいかに大きな変革をもたらしたか明らかにするが，限りある紙幅に最大限の情報を盛り込むために第9，10節とも〈表〉を基本にし，その内容について必要最小限の説明を加える方法をとる。

第9節 17－18世紀ロシアの主だった個人蔵書

科学アカデミー図書館の蔵書数は18世紀末で約4万冊，モスクワ大学は1802年の時点で9,944冊（文献26，p.12）と1万冊に満たなかった。またピョートル時代に各分野で最大の蔵書を持っていた機関の名称，冊数，目録ないしは記録の年代だけについて簡単にふれると次の通りである。年代順に挙げると使節庁350冊以上（1720），トロイツェ・セルギエフ修道院1,677冊（1723），ペテルブルグ兵器廠1,048冊（1723），宗務院約2,800冊（1725），モスクワ印刷所3,245冊（1727），スラヴ・ギリシャ・ラテンアカデミー696冊（1739）で，これらの文庫は当時のロシアではそれぞれの分野で群を抜いて文字どおり桁違いの大きな蔵書数であった。したがって17－18世紀ロシアにおいて書籍文化史をかたる上で〔表6〕－〔表8－2〕に示した個人蔵書は不可欠の要素であり，大きな比重を占めている。この時代書物は高価なものであり，高額な動産でもあった。それゆえ書物の数はその所有者の知識や興味だけではなく財力をも反映するものであった。

(1) 17世紀の個人蔵書

17世紀の個人蔵書で記録に残っているのは皇族，高位聖職者，政府高官の貴族である。目録は蔵書の所有者が没した時点で財産確認のため官吏の手により作成されている。A.C.マトヴェーエフの場合はツァーリの不興をこうむり流刑・財産没収の措置が取られた時点で作成された。18世紀の目録作成も同様である。

17世紀ロシアで最も冊数が多い個人蔵書はモスクワ印刷所で校正職を努めたシリヴェス

トル・メドヴェージェフがポーロツキィ蔵書を引き継いだもので，当時のロシアにおける最大の知識人である両者の蔵書の明確な区分はない。宗教改革を行った総主教ニーコンの蔵書に関する目録は，ニーコンがツァーリ・アレクセイとの意見の衝突からモスクワを離れた1658年の時点で作成されたものである。ストローガノフ家には他にも蔵書があったと伝えられているが，目録が発見されているM.M.ストローガノフ蔵書は書籍141冊と聖歌隊員の小楽譜集の写本105冊から成る。17世紀末までの個人蔵書の内容は宗教，歴史，言語学，地理及び地誌，哲学が主体である。

〔表6〕17世紀ロシアの判明している主要な個人蔵書

所有者	目録作成年	冊数	世俗的内容の書物	外国語の書物	外国語の種類	世俗的内容の主題
C.メドヴェージェフ & C.ポーロツキィ	1689	651	25 %	— %	羅,ポ, 他	歴,哲,言,地,医,生物,数,法,文
アファナーシィ・ホルモゴルスキィ	1702	490	15	—	ギ,羅,独	歴,天·宇,医,数,軍,建,文
皇帝フョードル・アレクセーエヴィチ	1682/83	280	約40	約20	羅,ポ	歴,軍,外交,地理,天文,医,数,建,文
総主教フィラレート	1630	261	2	0.4	独	歴
皇太子アレクセイ・アレクセーエヴィチ	—	215	—	約65	—	歴,地理,言,哲,軍,数
総主教ニーコン	1658	156	20	64.7	羅,ギ,独	歴,哲,言,医
府主教サルスキィ &パーヴェル	1675	149	約10	約20	羅,ギ,ポ	歴,言,哲
M.M.ストローガノフ	1627	246	?	—	—	—
校正職エフフィーミィ	1705	112	—	約35	ギ,ポ, 羅	言,歴
大主教クレムレフ	1651	101	約5	なし	—	歴,言,哲
B.B.ゴリーツィン	1689	93	50以上	約10	独,ポ	歴,哲,言,法,軍,政,動物, 測地,文
A.C.マトヴェーエフ	1677	77	80以上	100	羅,独,ギ,ポ	建,造園,地理,宇宙,歴,論理,軍,鉱物,医,法,修辞,測地,言,文
府主教イグナーチィ・リムスキィ＝コルサコフ	1700	75	5	なし	—	医,歴
エピファーニィ・スラヴィネツキィ	1675	72	30以上	53	羅,ギ,ポ	歴,言,哲,地
リフード家	1705	58	?	100	ギ,羅	言,哲
総主教イオアキム	1700	52	6	なし	—	歴,言
軍司令官メシチェリノフ	1676	48	25	なし	—	歴,医,軍
皇太子アレクセイ・ミハイロヴィチ	?	15	約35	なし	—	言,宇宙,歴
総主教アドリアン	1700?	13	35	約8	独	歴,地理
皇帝ミハイル・フョードロヴィチ	1634	11	約20	なし	—	歴,哲

（文献11，p.148−150）より引用

(2) 18世紀第1四半期ロシアの個人蔵書

「ピョートル蔵書」は〔表7〕では除外したが，ピョートルの改革による科学の到来を反映した蔵書が大きな位置を占めている。とりわけブリュースの死後科学アカデミーに寄贈された彼の蔵書は数学，物理，光学，力学，工学，天文学など自然科学に重点を置いた全分野にわたるコレクションで，この時代のロシアでは群を抜くものである(注9)。A.A.マトヴェーエフは前述したA.C.マトヴェーエフの息子で祖父の代から3代にわたる外交官である。P.K.アレスキンは医薬庁，医薬庁文庫，科学アカデミー図書館，クンストカーメラを統括し，ピョートルの侍医も務めた人物で，医学及び生物学を主体にした彼の蔵書は「ピョートル蔵書」のその分野での不足を補って余りあるものがある。政治・外交分野で活躍した公爵ゴリーツィンの蔵書に関してルッポフは詳細な資料研究に基づき2,765冊とみなしており，一説に約6,000冊と言われることについては3,000冊以上も失われた具体的根拠がないとして明確に否定している（文献12，p.210-212)。ゴリーツィン蔵書の言語別内訳は露682，仏994，羅447，独348，伊131，英68，蘭44，スペイン23，ポーランド14，スウェーデン5，ギリシャ語4冊である（文献12，p.212)。

長老修道士セルギィ，司祭フロール・ハリトーホフ，農民チモフェイ・レオンチエフはともに分離派で，3人の蔵書は112冊，28冊，12冊とそれほど多くはないが分離派の中にもかなり財力がある人物がいたことを示すものである。

〔表7〕18世紀第1四半期ロシアの判明している個人蔵書

所有者	冊数	世俗的内容の書物	写本の有無	外国語書籍	外国語の種類	世俗的内容の主題	蔵書全体の特色
Д.М.ゴリーツィン	2765	大部分	あり	% 73.5	仏，羅，独，英，伊，蘭，スペイン，ス，ポ，ギ	政，法，外交，歴，言，哲，系譜・紋章，地理，自然科学（少数），学術的定刊，文	大体において法学及び政治傾向の人文科学文献
P.K.アレスキン	2527	% 97	不明	ほぼ 100	英，羅，独，仏	医，薬理，解剖及び生物，化，地理，歴，哲，建，博物，文	大体は医・生物，かなりの数の歴史及び地理文献
Я.B.ブリュース	1576	93.5	少数	97.4	独，英，羅，蘭，仏，伊，ス，ポ，他	数，天文，物，力学，工，医，生物，地質・地理，軍，歴・古銭	自然科学を主体とし，全分野に及ぶ
外交官 A.A.マトヴェーエフ	1301	大部分	あり	82.4	羅，独，仏，ポ，英	歴，法，言，哲，修辞，地理，物・数，生物，軍・海事，文	歴，法，及び多数の地理学書を主とした人文科学
府主教ステファン・ヤロフスキィ	609	一部分	4.6%	85	羅，ポ	歴，哲，地理，文	宗教。人文が少数
Ф.П.ポリカルポフ	581	54.5	1.4	3.3	羅，ギ	歴，言，地理，軍，海事，物・数，文	大体は宗教及び人文
掌院フェオフィル・クローリク	503	小部分	あり	92.9	羅，独，仏，ポ	言，哲・論理，歴，政・法，	宗教及び人文

П.П.シャフィーロフ	484	大部分	不明	ほぼ100	仏，独，羅，伊	歴，地理，言，法，文	人文及び地理
府主教イオフ	435	23.7	41.8	17	羅，ポ，ギ	歴，言，軍・海事，自然科学・医(少数)	宗教及び人文
大主教フェオドーシィ・ヤノーフスキィ	408	大部分	不明	不明	羅，独，ポ，仏，伊	法学，歴史，言，文	人文(法学及び宗教が主体)
A.A.ヴィニウス	375	大部分	不明	100	蘭，独，仏，羅，ポ	歴，法，言，政，哲，地理，解剖，軍，建，	大体において人文科学文献
主教ガブリイル・ブジンスキィ	365	49.3	不明	81.1	羅	歴，法，言，哲，地理，文	宗教及び人文
皇太子アレクセイ・ペトローヴィチ	360	小部分	有り	75	独，ポ，羅，ギ	歴史，言語，数学，軍事	宗教及び軍事，数学，歴史
府主教ワルラアム	354	22.3	7.6	60.0	羅，ポ，仏，ギ	歴，言，修辞，哲，文	宗教，及び人文
A.П.ガンニバル(プーシキンの曽祖父)	347	ほぼ100	なし	100	仏	数，軍，地理，歴，文	軍事技術，数学，歴史
A.ファルヴァルソン	300	不明	不明	不明	英，蘭，独，羅	数，航海	数学，航海
府主教ドミトリィ・ロストフスキィ	288	20	あり	66.7	羅，ギ，ポ	歴，言	宗教及び歴史・文学
皇女ナターリヤ・アレクセーエヴナ	284	45.9	29.2	1冊	ポ	文，歴，軍・海事，言，教訓的文献	文学，人文，宗教
Г.ポリコーラ	142	100	不明	100	仏，羅	医，解剖，言，歴，哲	医，生物，人文
長老修道士セルギィ(分離派)	112	4.5	68.8	なし	なし	教科書，年代記，イソップ寓話	宗教
修道司祭イオフ	105	46.2	なし	61.9	羅，ギ，ポ，ヘブライ	言，哲，論理	宗教及び言語学傾向の人文
掌院ゲデオン	85	14	11.8	5	ポ，羅	数，言，文	宗教，個別の世俗的書物
主教エピファーニィ	83	12.0	不明	25.4	羅	言，紋章，医	同上
府主教パホーミィ	69	13.0	有り	8.7	ルーマニア	歴，紋章，哲	同上
主教パーヴェル	69	13.0	なし	なし	なし	歴，言，地理，教訓的	同上
長老修道士チャルヌツキィ	57	10	5	不明	ポ，羅	修辞，弁論術	同上
長老修道士セルギィ	47	17	不明	なし	なし	歴，言	宗教及び歴史
Д.E.トヴェリチノフ	26	30.4	大部分	17.4	羅	解剖，医，歴	宗，医，解学，個別の人文
フロール・ハリトーホフ(分離派司祭)	28	なし	71.4	なし	なし	なし	宗教
府主教チーホン	19	なし	5	なし	なし	なし	宗教
長司祭ゲオルギィ・ペトローフ	17	12	6	なし	なし	言，医	宗教及び個別の世俗的書物
農民チモフェイ・レオンチエフ(分離派)	12	なし	100	なし	なし	なし	宗教

(文献12，p.268－272) より引用

(3) ピョートル後 (1725－1741) の個人蔵書

この時代になると蔵書所有者の社会的階層はさらに大きなひろがりを見せ，とりわけ100冊未満のところに商人の名が目立つようになる。これは識字率の向上という側面もあるが，

主要な点は商業資本家が着実に力をつけてきたことの現われと考えられる。

この時代最大の蔵書を所有したフェオファン・プロコポーヴィチ（1681－1736）は宗教の分野でピョートルの改革を担った人物。彼は1681年にキエフで生まれ，1698年にキエフ＝モギーラ・コレギウムを卒業後当時ポーランド共和国領であったリヴォフで学ぶ。その後イタリアに行き3年間ローマの聖アファナーシィ・コレギウムで哲学，詩学，古代ローマ史，修辞学，神学を学び，1704年からキエフで母校の教師となる。彼はラテン，ギリシャ，ヘブライ語以外にも様々な西欧の言語を理解した。1711年にはピョートルのプルート遠征に同行しており，1716年にピョートルからの招請を受けてペテルブルグへとやって来る。1718年にプスコフ主教に叙聖された時点から彼はピョートルの側近となり，1721年に総主教制度を廃止して宗務院が新設されるとその次官に任命されピョートル改革の宗教面で中心的に活動する。プロコポーヴィチはピョートルの死後権勢を誇ったメーンシコフや高位聖職者達から敵視され，プロテスタントの信奉者であるとの密告により告発され苦境に陥る。しかし彼も敵対者を秘密調査官房に密告し，ビロン及びドイツ派を利用して巻き返しに成功して宗教分野の第一人者のまま人生を終える。彼の個人蔵書は4,000冊とも伝えらるが正確な数字は不明で，記録として残されているのはアントニィ修道院付属ノヴゴロド中等神学校に移譲された刊本3,192冊と写本13冊の合計3,205冊である（文献13，p.253-260）。

政治家で歴史学者でもあったタチーシチェフには1,000以上の第1コレクションと300冊以上の第2コレクションが存在した（文献13，p.213）。

〔表8－1〕ピョートル時代後（1725—1741）の判明している主要な個人蔵書

所有者	冊数	世俗的内容の書物	写本の有無	外国語の書物	外国語の種類	世俗的内容の主題	蔵書全体の特色
				%			
フェオファン・プロコポーヴィチ	3205	65	あり	9.85	羅，ギ，ポ，伊，独，仏，アラビア	歴，言，法，哲，論理，修辞，教育，数，物，化，天文，地理，生物，医，建（少数），軍（少数），全科学，書誌，文	大体において人文科学。かなり多数の神学及び自然科学書あり
A.И.オステルマン	約2300	圧倒的多数	あり	圧倒的多数	仏，独，羅，蘭，ス，伊，英，ポ，デンマーク，トルコ，中国，アラビア	歴，政，法，言，哲，系譜，教育，道徳，地理，数，物，生物，医，工，建，軍事科学，文，全科学的定刊，多巻物及び情報出版物	全分野。人文では歴，政，法，言，また自然科学では地理，数，医が圧倒的に多い

フェオフィラクト・ロパチンスキィ	1416	30	あり	92.2	羅,ギ,ポ,独,仏,伊,蘭,英,ヘブライ,アラビア,スペイン	歴,哲,論理,言,修辞,法,教育,教訓的,法令,数,天文,物,地理,生物,医,工,建,文	神学及び大体において人文科学分野の世俗的内容の書物
歴史学者・政治家 B.H.タチーシチェフ	1300以上	圧倒的多数	あり	不明	独,羅,ポ,仏,ス,蘭	歴,言,地理,数,天文,物,工,生物・医,軍,建,立法及び情報資料	人文（大体は歴史）及び相当数の自然科学（主に地理）
アファナーシィ・コンドイジン	930	一部分	不明	99	羅,ギ,仏	歴,法,哲,言,道徳,地理,生物,文	宗教及び少数の世俗的内容
A.Φ.フルシチョフ	602	82	あり	99以上	仏,蘭,羅,伊,独	歴,哲,論理,地理物・数,建,軍・海事,学術定刊,文	科学的定刊,歴,哲,論理,物・数,地理
大主教アンヴロシィ	601	少数	あり	92	羅,ギ,ポ	歴,言,哲,修辞,道徳,地理,医,生物,物・数,学術定刊,文	宗教及び少数の世俗的内容の書物
A.Π.ヴォルインスキィ	545	75.9	あり	47.5	独,羅,ポ,仏,伊	歴,言,法,教育,修辞,数,地理,軍・海事,法・情報	人文及び多数の地理,数,立法・情報文献
アカデミー研究員 Г.パシケ	537	大多数	なし	100	羅,仏,独	歴,言,法,地理,生物,医,文	人文及び少数の自然科学書
アカデミー教授植物学者・医師J.アマン	451	不明	不明	不明	羅,独,仏,英	植・動物,解剖,遺伝,医・薬学,地理	植物学及びその他の生物学
ラヴレンチィ・ゴルカ	355	33	あり	65.9	羅,ギ,ヘブライ,ポ	歴,哲,言,修辞,地理,立法,文	宗教と人文。自然科学少数
Π.M.エロプキン	319	98.1	あり	不明	仏,独,伊	歴,言,哲,修辞,数,地,建,軍,文	歴史及び建,物,数,地理
共同統治者アンナ・レオポリドヴナ	290	不明	なし	不明	仏,独	歴,地理,文,回想記	軽い読み物
翻訳官 И.B.パウゼ	220	不明	多数	約15	独,羅	言,歴,教育,物・数,文	人文。宗教及び自然科学
M.Г.ゴローフキン	217	40以上	あり	25.8	独	歴,哲,言,地理,建	大体は宗教。その他世俗的
エフフィーミィ・コレッティ	200	35	あり	77.5	伊,羅,ギ	言,歴,哲,修辞,法,地理,医	宗教。比較的少数の世俗的
シベリア探検家D.G.メッサーシュミット	170	大多数	あり	大多数	羅,仏,伊,蘭	生物,医,化,数,地理,哲,歴,法	生物・医,若干の物・数,人文
伯爵・陸軍元帥・政治家 Б.-X.ミニフ	157	大部分	あり	大部分	独,仏,伊,羅	軍,数,建,地理,歴,言,文	軍,物・数と地理。宗,人文も
K.-Л.メングデン	136	大部分	不明	大部分	独,仏	法,言,歴	大体は人文。地理,工,宗も
ニージニィ・ノヴゴロド主教ピティリム	121	33	あり	12	ギ,羅,独,ポ	歴,地理,その他	宗教。比較的少数の世俗的
ロストフ主教ゲオルギィ・ダーシコフ	100	12	あり	1冊	ギ	偶然のこと	宗教。少数の世俗的

（文献13, p.290-295）より引用

〔表８－２〕ピョートル時代後（1725－1741）の100冊未満の個人蔵書（聖職者８人を除く）

所　有　者	冊数	世俗的内　容	写本有無	外国語書籍	外国語の種類	世俗的内容の主題	蔵書全体の特色
翻訳官 И.K.ロッソヒン	86	99%	あり	大多数	中国,満州	歴,言,法,自然科学及び軍事科学,文	大体は人文。自然科学,軍事も
イオアサフ・ヴォロコラムスキィ	67	13.7	31冊	なし	なし	言,初等読本,医,地理	大体は宗教。世俗的内容も
古儀式派 B.B.クラシェンニコフ	60	なし	52冊	なし	なし	なし	宗教のみ
商人イワン・ルイビンスキィ	58	52	あり	19%	独,仏	歴史,法学,地理	様々な世俗的書物及び宗教
歴史家A.B.クラマー（アカデミー助教授）	45	100	あり	不明	独,羅	歴史	圧倒的多数が歴史的性格の写本
商人グリゴーリィ・トロフィーモフ	44	45.4	あり	なし	なし	歴,地理,教訓的,文学的文献	宗教及び人文
連隊書記官イワン・ブルガーコフ	38	不明	あり	2.1	仏	軍事,言語,楽譜	不明
商人アルテーミィ・イコンニコフ	30	なし	なし	なし	なし	なし	宗教のみ
商人ワシーリィ・ソロンニコフ	30	36.7	なし	なし	なし	歴史,地理,規定	宗教及び人文
アントン＝ウーリリフ	26	100	なし	不明	不明	地図,軍事的･歴史的文献	地図,軍事的･歴史的文献
商人アンドレイ・セミョーノフ	22	13.7	あり	なし	なし	歴史	宗教及び若干の歴史書
商人ミハイル・サーヴィン	22	9	あり	4.5	ポーランド	言語	宗教。世俗的内容の書物２
商人マクシム・デミードフ	14	－	なし	－	－	歴史	宗教のみ
事務官フィリップ・ソーボレフ	11	なし	なし	なし	なし	なし	宗教のみ
商人イワン・コロートキィ	11	36	あり	18	独	歴史,言語,獣医学	宗教。世俗的内容の書物4
商人イワン・ヴェセローフスキィ	11	65	なし	なし	なし	歴史,情報文献	人文科学及び歴史
書記官アレクセイ・ヴォルコフ	8	62.5	なし	なし	なし	情報文献,歴史	人文科学及び歴史
古儀式派ミハイル・プローホロフ	8	大多数	全部	なし	なし	歴史	宗教及び世俗的内容の写本
官吏M.ベドリン	5	なし	なし	なし	なし	なし	宗教のみ

（文献13, p.296-299）より引用

(4) 上記以外の個人蔵書

以上はルッポフがまとめた17世紀から1740年までの時代の個人蔵書に関する研究の成果である。その後については同様のまとまった研究はないが個別の個人蔵書に関する研究論文が散見される。1740年以前と比較した場合，1740年以後の最大の特徴はロシア人学者の蔵書の増大が顕著なことである。以下，これまでにロシアで研究対象となった個人蔵書に

ついて人名と要点だけを列記しておきたい。

女帝エリザヴェータ・ペトロヴナ（ピョートルとエカテリーナ1世との間に生まれた）（1709－61，在位1741－61）：フランス語文献142点（583冊）。

И.Г.レストーク（1692－1767）エリザヴェータ・ペトロヴナの侍医：317点。

Ф.И.ソイモーソフ（1692－1780）政治家，ロシア水路学の創始者：124点。

Д.И.ヴィノグラードフ（1720－58）ロシアの磁器の生みの親：冶金学文献91点，様々な言語による様々な分野186点。

С.П.クラシェニーンニコフ（1713－55）博物学者，探検家：122点または152冊。

А.П.プロターソフ（1724－96,）科学アカデミー会員，解剖学・生理学者，医者：338点（約400冊）。

Ф.У.Т.エピヌス（1724－1802）科学アカデミー会員，物理学者：879点（1,075冊）。

П.Ф.ジューコフ（1736－82）外務参議会職員：585点。

М.М.シチェルバートフ（1733－90）歴史家：約15,000冊の他に多数の手稿。

А.Д.メーンシコフ（1673－1729）：一説には約13,000冊と伝えられるが，正確な冊数は不明。1987年に目録が発見され，研究が進められている。

シェレメーチェフ家 ボリス（1652－1719），ピョートル（1713－1788），ニコライ（1751－1809）の3代にわたる：10,767冊及び版画，絵画，地図2,746点。

Г.Г.オルローフ（1734－83）エカテリーナ2世の寵臣：1,441点（2,708冊）

И.А.コルフ（1697－1766）第3代科学アカデミー総裁：30,000～34,000冊。

М.В.ロモノーソフ（1711－65）科学アカデミー会員，科学者：全体の点数は不明だがヘルシンキ大学図書館で発見された55点が1977年に科学アカデミー図書館に寄贈されている。それ以前にロシアで発見されていたのは3冊のみ。

エカテリーナ2世（1729－1796，在位1762－96）：ディドロ蔵書2,904冊，ヴォルテール蔵書6,801冊，F.ガリアーニ蔵書1,000冊，夫ピョートル3世蔵書4,153冊，コルフ蔵書30,000～34,000冊，オルローフ蔵書2,708冊，シチェルバートフ蔵書の一部分8,631冊，ドイツ人ニコライを通じての13,000冊購入その他。

(5) 18世紀前半の科学アカデミー図書館受入れ図書に占める個人蔵書

科学アカデミー開設までに図書館が受入れた書籍11,793冊のうち外国で購入したものは約900冊，7.6％と少数にとどまり，個人蔵書が圧倒的多数を占めている。シュマーヘルは1721年にピョートルの命により書籍を買いつけることを主要な目的として翌1722年にかけて西欧の各地を訪れている。その結果運ばれてきたのは314点541冊であり，受入れた大きな個人蔵書と比較するとそれほど効率的ではない。1722年に帰国したシュマーヘルはピョートルに詳細な出張報告を提出している。彼はフランス，ドイツ，オランダ，イギリスで多数の図書館を訪問しており，さらに個人蔵書だけでも200個所以上を見て回っている。報告書

の中でシュマーヘルは，王立や大学の図書館は言うに及ばずほとんどすべての自由都市に民衆が利用可能な図書館があることに言及している。そして有名な図書館としてウィーンの帝室図書館，ベルリンとパリの王立図書館，ライデン，オックスフォード，ケンブリッヂほかの大学図書館名を挙げ，特にフランス王立図書館は蔵書数8万冊，手稿17,000点にのぼることにふれている（文献8，p.20－21）。1722年の時点で科学アカデミー図書館はようやく1万点を超えたところである。

科学アカデミー開設後は外国での買入れが18件2,109冊と増大し，通常での受入れや図書交換も行われるようになる。しかしながら科学アカデミー図書館が1726年から1747年までに受入れた10,616冊のうち個人蔵書は17件8,105冊で76.3％を占めている。

〔表９－１〕科学アカデミー開設までの受入れ図書

受入れ年	受入れた図書	冊数	点数
1714	モスクワから運ばれた書籍及びゴットルプ蔵書	2000	—
1716	クールランド公国蔵書	2763	2585
1717	外国で購入分，及びブリュースより受入れ	92	65
1718	翻訳官ヴィニウス蔵書	375	363
1718	ピトカーン蔵書	1906	1522
1719	アレスキン蔵書	2527	2322
1719	パリムストリク蔵書	123	120
1719	マカーロフから譲渡された書籍	74	67
1722	シュマーヘルにより外国から運ばれてきた書籍	541	314
1723	1723年に外国で買い集められた書籍	31	14
1724	1724年に外国で買い集められた書籍	32	17
1724	ビザンチン史：パリで購入したピョートル蔵書	36	1
1724	商業参議会長官П.П.シャフィーロフ蔵書	484	265
1725	1725年に外国で買い集められた書籍	289	113
1725	ピョートルの書籍(第1回分)	208	117
1725	宮廷侍医エリック・ポリコーラ蔵書より	142	121
1725	イオナス，ヴォイトキン，クランツから購入	(170)	
合計		11793	

（文献8，p.25）より引用

〔表９－２〕科学アカデミー開設後1726－1747年の受入れ図書

受入年	受入れ図書	冊数	受入年	受入れ図書	冊数
1726	外国での買入れ	67	1737	外国での買入れ	12
1727	外国での買入れ	136	1738	彫版家P.ピカート蔵書より	12
1728	外国での買入れ	177	1738	外国での買入れ	67
1728-29	ピョートル蔵書	1620	1738	図書交換でリスボン・アカデミーから	27
1729	アレクセイ蔵書	269	1739	外国での買入れ	107
1729-30	外国での買入れ	157	1740	外国での買入れ	105
1730	図書交換で中国から運ばれた書籍	82	1741	探検家メッサーシュッミット蔵書	170
1731-32	外国での買入れ	414	1741	パシケ蔵書	537
1732	書籍商F.ミューラーの書籍	11	1741	外国での買入れ	79
1733	外国での買入れ	255	1742	外国での買入れ	66

1732	書籍商F.ミューラーの書籍	11	1741	外国での買入れ	79
1733	外国での買入れ	255	1742	外国での買入れ	66
1734	外国での買入れ	11	1742	J.アマン蔵書	106
1735	外国での買入れ	12	1742	フルシチョフ蔵書	391
1735	歴史家A.B.クラマーの書籍	15	1746	オステルマン，ミニフ，ゴローフキン，メングデンの蔵書から	597
1735	翻訳官パウゼ蔵書	177	1746	コルフ蔵書より	1738
1726-35	通常受入れの露語刊本・写本	(260)	1747	サンチェス蔵書	(800)
1726-35	贈り物の外国語書籍	(50)	1747	デリール蔵書	42
1736	外国での買入れ	44	1736-47	通常受入れの露語刊本・写本	312
1736-37	ブリュース蔵書	1631	1736-47	贈り物の外国語書籍	(60)
			合計		10616

（文献8，p.71）より引用

第10節　16－18世紀ロシアの出版事情

第１項　17世紀末までのロシアの出版

ロシアではイワン4世（雷帝）治世の1550年代に政治的及び宗教的必要性から国策として活版印刷が開始されている。その目的は第１にモスクワ国家領内のすべての教会に対して，異端発生の原因となる多数の歪曲や誤りを含む写本にかえて，訂正され確定された単一の奉神礼書（典礼書）即ち「国定」版を与えることであった。第２は，1552年にイスラム教徒であるタタール人が支配していたカザン汗国を征服し新たな支配地域を拡大したことに起因し，急速に増大しつつあった奉神礼書の需要増に応えるためであった。したがって16世紀は19点すべてが『聖使徒経』，『福音経（福音書）』，『聖詠経（詩編）』，『時課経（聖務日課書）』などの奉神礼書（典礼書）であり，17世紀は488点のうち奉神礼書が411点，奉神礼書ではない宗教的書物が68点で，世俗的内容の書物はわずか９点のみであった。奉神礼書ではない宗教的書物には『聖書』，『教会法典集』，『諸聖略伝』，ギリシャ人およびウクライナ人である教会文筆家，歴代モスクワ総主教，シメオン・ポーロツキィ等の著作の他に『初等読本』８点が含まれている。これらの『初等読本』は題材を主として宗教的な原本に拠っているため，奉神礼書ではない宗教的書物に分類されている。世俗的内容の書物は，軍事２，法律２，言語１，数学（算数）１，その他３点である。17世紀ロシアの出版部数は1,200部（１ザヴォート）を基本単位とし，それ以上は2,400部，3,600部と倍数で印刷部数を決定した。

ピョートルは以上のような宗教中心の出版体制に鑑みて，すでに述べたようにオランダで世俗的書物の出版を志向する。しかしながらキリル文字が障害となって必ずしも順調には推移せず，外国からの人材確保を含めロシア国内での出版の条件整備に着手することになる。

〔表10〕17世紀年代別出版点数の推移

年　代	出版点数	備　　考
1601－1610	13	1603,1605,1608年に印刷は行われたが出版は1冊もない
1611－1620	10	1613年にニージニィ・ノヴゴロドでの出版1点あり
1621－1630	45	
1631－1640	68	ブールツォフの出版物15点を含む
1641－1650	78	ブールツォフの出版物2点を含む
1651－1660	60	ニーコンがヴァルダイで出版した3点を含む
1661－1670	42	ニーコンがヴァルダイで出版した1点と1葉を含む
1671－1680	33	シメオン・ポーロツキィの「御上の印刷所」出版物4点を含む
1681－1690	63	シメオン・ポーロツキィの「御上の印刷所」出版物2点を含む
1691－1700	71	
合計	483	

（A.C.ジョールノワ著『16-17世紀モスクワのキリル文字出版物総目録』（1958年刊）により作成）

なお17世紀末までのロシア，ウクライナ，ベラルーシ，リトワの出版事情についての詳細は『早稲田大学図書館紀要』（第40,41,43,46号）所収の拙稿「ロシアにおける書籍印刷」（第1回－第4回）を参照されたい。

第2項 18世紀第1四半期のロシアの出版

ピョートルの出版政策はイワン4世（雷帝）治世の1550年代に国策として活版印刷が開始されて以来の大改革である。世俗的内容の出版物を印刷するための文字改革は1708年に着手され旧字体のキリル文字に代わる世俗文字（注10：訳語）による書籍印刷が開始される。現在のロシア文字に近い新字体は1710年に最終的に確定される（文献15，p.13）。文字改革によりアラビア数字の使用が導入され，それまでのキリル文字のアルファベットを代用する不便な方法に取って代った。

ピョートルは当時の最先端のメディアである出版に対しても明確な考えを持ち細かい指示を出している。彼は書物の内容を的確に伝えるため挿絵，図版を重視している。そして翻訳に際しては逐語訳ではなく，文意を正確に伝えることを求め（文献6，p.24），また冗漫な部分は削除し，読者に分かり易くするよう指示している（文献12，p.100）。ピョートル時代の書籍の翻訳者は写本を除いてブリュースを始め翻訳官ヴィニウス，コピエフスキィ，シャフィーロフなど27人の名前が判明している。しかしながら翻訳の対象となる分野は，自然科学，工学，技術の分野にも及びスタッフ不足は否めなかった。一例を挙げると1708年に力学の書籍の翻訳に取りかかったヴィニウスはその難しさを訴えているが，恐らくは翻訳をやり直したと思われるブリュースがヴィニウスの翻訳が驚くほど下手であると指摘している（文献6，p.81）。ピョートルは1724年1月23日付で翻訳者育成に関する勅令を出す。その中で特に数学，力学，外科医学，非軍事的建築，解剖学，植物学，軍事などを具体的に挙げ，語学力があるものは専門分野を，また専門分野を持つ者は語学力を身につけ

るように指示している（文献12，p.100）。

ロシアでの出版は17世紀末までは基本的に**モスクワ印刷所**1個所で行われていた。同印刷所は1701年の時点で12台の印刷機が稼動しており，その他に予備3台があった。文字改革に伴い1708年にオランダから印刷機2台が運ばれ，1709年にはこれを手本に6台が補充された。1722年の稼動台数は14台（11台が旧字体のキリル文字用）で，スタッフ総数175名。1705年5月の勅令で設立された**キプリアーノフ印刷所**は「半官半民」でブリュースの指導下におかれた。銅版画，地図，図版などの印刷を主な経営内容にしたため書籍出版は3点のみである。

ペテルブルグ印刷所は文字改革後の1711年に開設されモスクワ印刷局から職人8名と共に移送された印刷機1台及び活字で活動を開始するが，1714年には世俗文字用2台，キリル文字用1台，銅版画用1台と職人46となる。さらに1719年には印刷機5台，銅版画用1台，小型の移動印刷機1台を保有し，職人80名，職員6名となるが，1721年には世俗文字用印刷機5台だけが稼動している。ペテルブルグでは1719年に**元老院印刷所**，1721年に**海軍士官学校印刷所**が出版活動を開始して世俗文字による出版を行っているが，ペテルブルグ印刷所からそれぞれの印刷所に印刷機1台がまわされている。**アレクサンドル・ネフスキィ修道院印刷所**は1719年12月13日の勅令に基づきフェオファン・プロコポーヴィチのイニシアティブで設立され，ペテルブルグ印刷所からの印刷機一台で翌1720年3月に出版活動を開始した。出版はキリル文字によるものだが，基本的には神学ではないものを出版した。**移動印刷所**はピョートルが1722年のペルシャ遠征の際に印刷機1台，活字鋳造職人1名，植字工1名，職人5人，活字（ロシア語，ラテン文字，トルコ語）を同行させたもので，そのすべてはモスクワ印刷局から送られた。行軍中にトルコ語の声明書3点を刊行し，翌1723年に帰還している（文献12，p.61－68）。通称**キエフ印刷所**（キエフ・ペチェールスカヤ大修道院印刷所）は1615年から，また通称**チェルニーゴフ印刷所**（トロイツコ・イリインスキィ修道院印刷所）は1680年から活動している。

〔表11〕1701－1724年の出版物印刷所別・分野別一覧表

①立法関係　②情報的性格　③新聞「ヴェードモスチ」　④暦　⑤軍事　⑥海事・造船　⑦自然科学　⑧人文科学　⑨教訓的・教育的文献　⑩建築・造園　⑪初等読本　⑫文学　⑬世俗的主題の宗教的文献　⑭宗教的文献

印刷所名	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	合計
ペテルブルグ	215	31	249	20	2	38	9	31	6	1	8	39	11	31	691
モスクワ	106	38	335	17	19	4	13	17	4	3	8	31	23	96	714
元老院	55	8	－	－	－	－	－	1	－	－	－	－	－	－	64
海軍士官学校	17	－	－	－	－	1	1	－	－	－	－	－	－	－	19
A.H.修道院	2	1	－	－	－	－	－	1	1	－	10	3	3	6	27
キプリアーノフ	－	－	－	－	－	1	2	－	－	－	－	－	－	－	3
移動印刷所	－	2	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	－	2
キエフ	3	1	－	4	1	－	－	－	1	－	1	5	5	41	62

チェルニーゴフ	1	−	−	1	−	−	−	−	1	−	2	−	2	29	36
リガ	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	3	−	−	4
レーヴェリ	−	1	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	−	2
不明	236	5	−	1	1	1	1	−	−	−	−	1	2	5	253
合計	636	87	584	43	23	45	26	50	13	4	29	83	46	208	1877

（文献12，p.98）より引用

分野別の分類の判断は個々に見ると違いもあり説明が複雑になるのでここではルッポフが行った分析を〔表11〕及び〔表12〕としてそのまま引用する。これらの表ではキリル文字による出版物と世俗文字による出版物の区分はされていない。活版印刷によるロシアで初めての新聞『ヴェードモスチ』（③の項目）も統計に含まれており発行回数は一定ではないが出版点数は最も多い。したがって『ヴェードモスチ』を除いた単行本の数は1713年までは年平均19.5冊である。1714年からはペテルブルグ印刷所の出版活動が活発になり，特に立法関係（①の項目）が急増している。世俗的主題の宗教的文献（⑬の項目）及び宗教的文献（⑭の項目）は世俗文字でもごく少数出版が行われているが，大部分はモスクワでコンスタントな活動が続けられたキリル文字による出版物である。

〔表12〕18世紀第１四半期出版物の年代別・分野別一覧表　（分野別は〔表11〕と同じ）

年	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫	⑬	⑭	合計
1701	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	1	6	8
1702	−	2	2	−	1	1	−	−	−	−	−	2	3	9	20
1703	−	−	39	−	−	−	2	−	−	−	−	2	2	9	54
1704	−	4	35	−	1	−	−	1	−	−	1	3	−	8	53
1705	−	1	46	−	1	−	1	1	−	−	1	2	1	12	66
1706	2	−	34	−	−	−	−	−	−	−	−	1	−	7	44
1707	−	4	28	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	15	47
1708	−	4	15	2	3	1	4	−	3	−	1	1	1	5	40
1709	−	4	13	1	7	1	1	2	−	1	1	9	1	1	49
1710	3	4	22	2	5	1	1	1	−	−	1	5	−	13	58
1711	−	4	19	1	2	−	−	2	−	−	−	1	3	11	43
1712	−	−	13	−	−	1	−	2	2	1	−	4	−	9	32
1713	−	−	24	5	1	−	1	2	−	−	−	1	−	7	41
1714	40	5	4	6	−	8	2	1	−	−	3	5	2	9	85
1715	29	−	11	2	−	4	2	−	−	−	1	−	−	10	59
1716	26	1	16	4	−	8	3	1	1	−	−	2	2	11	75
1717	17	1	4	2	−	−	1	6	2	−	2	13	1	12	61
1718	57	16	1	4	−	3	1	6	1	1	2	2	3	4	101
1719	56	5	43	−	−	5	2	3	1	−	−	1	1	7	124
1720	107	2	72	3	−	4	1	4	−	−	1	6	6	6	212
1721	107	14	39	3	−	4	−	6	−	−	2	9	3	7	194
1722	77	8	49	2	1	−	−	5	−	1	2	8	13	9	172
1723	22	6	31	3	−	3	3	4	1	−	5	5	2	5	90
1724	93	2	27	3	1	1	1	3	2	−	5	1	1	9	149
合計	636	87	584	43	23	45	26	50	13	4	29	83	46	208	1877

（文献12，p.86）より引用

第3項　1725—1800年の出版事情

ロシアでの出版活動はピョートル没後も，1727年に設立された科学アカデミー印刷所を中心に発展した。18世紀の出版活動も依然として国家主導によるものであり，科学アカデミー印刷所は以下に見るようにロシアの出版政策の指導的な立場にあった。

(1)　科学アカデミー印刷所ー出版活動とその他の役割

1727年初め頃までにアカデミー付属の小さな印刷所が設立され，のちにオランダから輸入された2台の印刷機と活字が補充される。1727年10月14日付の勅令により科学アカデミー印刷所は**ペテルブルグ印刷所**を2台の印刷機ならびにスタッフ全員と共に吸収合併する。ペテルブルグ印刷所が閉鎖時に所有していた印刷機は7台であった。1728年，科学アカデミー印刷所は印刷機4台とスタッフ18人の陣容となる。1729年 に《ロシア》と《ドイツ》の2部門に分かれ，西欧の活字のほかアラビア語やグルジア語の活字も所有していたが漢字は彫刻（または蝕刻）によった（文献7，p.129)。

1740年代は急速な拡大・強化の時代で，1741年頃までに校正者2名，植字工11名，印刷工及び助手18名の合計47名となる。この時代ペテルブルグでは印刷の仕事の80%以上が科学アカデミー印刷所に集中した。また科学アカデミー印刷所は元老院の政令の印刷など外部からの注文にも応じた。後には地方をも含む印刷所に熟練工を派遣したり，印刷機や活字の有料貸出しを行った。さらに科学アカデミー印刷所は必要に応じて様々な時期に人物像，活字鋳造，エッチング，製本，父型（活字の母型を造る鋼の雄型）などの特殊部門を設けた。科学アカデミー印刷所は初期の段階では活字をペテルブルグの他の印刷所から借用したり外国から取り寄せることを余儀なくされていたが，大部分を自前で供給出来るようなった。1740年代の初めに活字鋳造部門の一層の専門化を目的としてメダルや印章その他を製作するために父型部門が分離している。科学アカデミー印刷所の出版物には初期の段階からすでにエッチング部門によって製作された挿絵，見取図，図面，地図などが付されていた。製作の中心にいたのはドイツ人X.A.ヴォルトマンで，その弟子達の中からИ.A.ソコロフ，Г.カチャーロフ，M.И.ベレンツなどが育った（文献7，p.129—130)。

1747年の規則によりロシア語部門と外国語部門の2部門を確立。人員は両部門で24名とされ，それとは別に活字鋳造所に8名が認められたが，これは人員削減であった。しかしながら増大する仕事量はより多くの人員を必要とし不正規雇用が行われた（文献7，p.296)。

1750年に印刷機は8台から11台に増大しスタッフも47名になる。ルッポフが1983年に発表した資料によれば1753年12月頃スタッフは56名になり，このうち51名が印刷機に直接携わる。11台の印刷機はそれぞれ4～5名の職人集団によって運営された。職人集団は植字工を頂点にして印刷工，インク塗り工，見習い工（植字工の）で構成されていた。この当時植字工は7名のみで，1～7号機に配置され，8～11号機には経験ある見習い工（8号機のピョートル・チャフリョフは1736年から勤務）が配置されていた。この見習い工たちは高度な内

容の仕事をこなしていたにもかかわらず低賃金であった。これは将来の事業拡大を考えたアカデミーの人事政策の結果で，20人の見習い工がいた。見習い期間は2～17年と幅があり，それ以上の場合もあった。インク塗り工ピョートル・ゲラシーモヴィチは26年，ステパン・ボロトニコフも25年を経過している。植字工の見習い期間は10年以上で，年俸は30ルーブリであった。

1755年，スタッフ59名に。同年**モスクワ大学印刷所**へ印刷機2台とすべての付属品，大量の活字，植字工ポリャニコフ（6号機担当）と2人の見習い工を派遣。1756年，スタッフ67名に。同年**陸軍幼年学校印刷所**（1757年設立）のために2台の印刷機を準備（製作），何セットもの活字を鋳造。1759年，《ノヴォザヴェジョンナヤ》を設立。印刷機5台，スタッフ18名（正職員11名，見習い1名，技術主任1名）の陣容（文献7，p.297）。

1761年，科学アカデミー印刷所の協力のもとで**軍事参議会**と**砲兵技術学校**に印刷所が設置される。1763－64年に所有活字158ケースとなる。その内訳は，ロシア語54，ドイツ語47，カレンダー用ドイツ語6，ラテン語46，ポーランド語1，ギリシャ語1，トルコ語2，グルジア語1ケース。1764年，印刷所設立のためアストラハンに校正職1名，印刷所職員3名を派遣。1766年，スタッフ93名に。1776年《ノヴォザヴェジョンナヤ》閉鎖。スタッフ80名に縮小（文献7，p.297）。

1783年2月，勅令によりすべての都市で警察局の許可のもとに個人印刷所の設立がロシア語，外国語とも可能となるが1796年に個人印刷所の閉鎖される。個人印刷所が再び解禁となるのは1801年である。この時点から科学アカデミー印刷所は科学アカデミー自身の要望に応えるための機関となる。

科学アカデミー 印刷所の出版物がロシアの全出版物に占める割合は〔表13〕に示した通り1760年までは過半数をはるかに超えている。これをペテルブルグの出版物だけに限定すると1731－1740年は182点中158点（86.8％），1741－1750年は171点中139点（81.3％），1751－1760年は176点中160点（90.9％）と大部分を占めている。

〔表13〕科学アカデミー 印刷所出版物が全出版物に占める割合と分野別出版点数

年代	全出版点数	アカデミー 印刷所		分野	点数	分野	点数
		点数	比率(％)				
1725-1730	31	10	32.3	ロシア文学	422	学術・教育	61
1731-1740	211	157	74.4	外国文学	282	軍事	60
1741-1750	217	139	64.1	ロシア史	211	国家と法	52
1751-1760	276	158	57.2	世界史・各国史	111	普遍的・暦	47
1761-1770	1260	417	35.9	保健・医学	227	技術・工学	37
1771-1780	1863	468	25.1	宗教	140	経済	29
1781-1790	2880	276	9.6	自然科学	94	農林業・学	13
1791-1800	3048	241	7.9	言語学	90	文芸学	10
合計	9748	1868	19.2	哲学・心理	82	民俗学	9
				地理	69	遊び・占い	5

（文献23及び24.により作成）

(2) 世俗文字による印刷所別出版点数（1725－1800）

1725年以降のロシアの出版活動は以上に見たように科学アカデミーを中心に発展するが，地域ではペテルブルグ，モスクワ，地方都市の3つに大別することが出来るので〔表14－1〕－〔表14－3〕にまとめた。ペテルブルグは34印刷所5,176点に印刷所名のない275点を加えると5,445点となる。モスクワは19印刷所3,435点に印刷所名のない57点を加えると3,492点となる。地方都市は37印刷所あるが出版点数は合計で283点とごく少数にとどまっている。

政府機関及び学校に設立された一連の印刷所は自らの機関の役割に即した書籍以外にも営業政策として様々な書籍の出版を行っている。したがって印刷所名と出版内容は必ずしも一致せず，なかにはほとんど無関係のケースもある。印刷所を設立したものの経営が困難で賃貸して賃料を稼いでいる印刷所が目立つところは現代日本の「函物」行政に似ている。ロシア人の私営印刷所が許可されるのは1783年だが，実質的には賃貸という形態で1770年代から始められている。また外国語及びロシア語による出版の特許状を得た外国人印刷者による出版も1770年代に始められている。

モスクワの**宗務院印刷所**はモスクワ印刷所を引き継いだもの。モスクワの**元老院印刷所**はペテルブルグの**元老院印刷所**で刊行されたものと同一のタイトルを刊行しているケースがある。**陸軍幼年学校印刷所**は文学152（露61，仏60，英10，独7，伊2，児童4），宗教56，歴史39，哲学・心理16（うち倫理13），学術・教育14，国家と法10，技術・工学10，言語10，地理7，保健・医学6，経済6，書籍目録12などで，軍事は15点のみである。**海軍幼年学校印刷所**も文学85，歴史33，保健・医学5等と点数こそ違え，同様の傾向を示している。ペテルブルグの**砲兵技術学校印刷所**は1765年から1772年の8年間に軍事・砲術1，ロシア史1，ロシア文学4（頌詞または頌詩3，喜劇1），哲学1（ルソー），教育全般1点の10点を刊行しただけで1773年から賃貸を行っており，またモスクワの**県庁印刷所**は独自の出版物が見当たらず残っているのはすべて賃借人による出版物である。**モスクワ大学印刷所**は1756年3月5日の勅令により設立されたが経営難から1779年以降ニコライ・ノヴィコフ（1744－1818）を皮切りに印刷所の賃貸を行っている。**劇場付属印刷所**の［劇場］とは1780年に私営の劇場として設立されたボリジョイ劇場と考えられる。

ノヴィコフは**モスクワ大学印刷所**で1779－1789年に単行本641点継続出版物29点を刊行しているがこのほかにもモスクワに「**印刷商会**」**印刷所**とフリーメイソンの「**秘密印刷所**」を作り旺盛な出版活動を行っている。ノヴィコフがこれら3つの印刷所で出版した書籍は文学421，宗教121，哲学・心理76，歴史66，言語55，学術・教育29，保健・医学19，技術・工学19，地理18，自然科学16，農林14，国家・法13，軍事5，文芸学6，芸術4，経済3，出版物目録8点とすべての分野にわたる。文学も露文156，仏文163，独文34，英文33，児童文学12その他イタリア，ポルトガル，デンマーク，スイス，アラビア，アジアと幅広い。ノヴィコフはそれ以前にも1766年に**砲兵技術学校印刷所**で自費出版（1,000部）したのを出

発点として，いくつかの印刷所で自費出版の形で出版活動を行っている。彼はまたモスクワ大学が1756年から出版していた『モスコーフスキエ・ヴェードモスチ』の編集を1779年から1789年の間編集を行っているが，それ以前は600部以下で低迷していた同紙を4,000部発行にまで読者を増やし編集者としての優れた手腕を示している。

1783年2月の勅令を発した時点ではエカテリーナ2世を「啓蒙」専制君主と呼ぶことも一応は可能であろう。だがフリーメイソンに係わりのあるノヴィコフの思想に危険を感じたエカテリーナ2世は1787年にモスクワの各書店を手入れし，判明しているだけでも彼の出版物を中心に226点106,296冊という大量の書籍をを押収している。その内容を見ると宗教163，哲学・心理29，文学24，言語5，学術・教育5，歴史3点の各分野で，出版社としてはノヴィコフの2印刷所（「モスクワ大学」74点，印刷商会36点）以外にも20印刷所に及び，ノヴィコフが生まれる以前の科学アカデミーの出版物3点を含むなど手当たり次第の観がある。そして，1790年に自著『ペテルブルグからモスクワへの旅』を出版したラジーシチェフをシベリアに流刑し，さらに1792年には再び書籍を没収したばかりかノヴィコフを逮捕投獄し，翌1793年には焚書の勅令を出して中世まがいの暴挙に及んでいる。そして1796年には私営印刷所閉鎖を決定し，1783年に許可した「自由な出版」の息の根を自らの手で止めている。なお，エカテリーナ2世は1796年11月6日に没している。

〔表14－1〕〈ペテルブルグ〉34印刷所（プラスの数字は年毎の雑誌・継続出版物の合計）

	印刷所名	点数	活動期間		印刷所名	点数	活動期間
1	ペテルブルグ	1+11	1711－1727	16	ガルチェンコフ	15	1783－1785
2	元　老　院	309+2	1719－	17	ブライトコプフ	94+2	1783－1799
3	海軍士官学校	41	1722－1752	18	ヘニング	21	1784－1785
4	科学アカデミー	1897 +346	1728－	19	オフチンニコフ	44	1784－1793
5	海軍幼年学校	337+9	1753－	20	帝　室	196+3	1784－
6	陸軍幼年学校	395+9	1757－	21	ヴィリコフスキィ &ガルチェンコフ	40+2	1785－1788
7	軍事参議会	288	1763－				
8	宗　務　院	70	1764－	22	ヘーク	39+2	1785－1793
9	砲兵技術学校	10	1765－1772	23	マイヤー	16	1785－1796
	賃借人シノール	29+4	1773－1776	24	ボグダーノフ	123+3	1787－1795
	賃借人名ナシ	4	1776	25	ラフマニノフ	15	1788－1790
	賃借人クレエン&ヘーク	26	1776－1777	26	ヴィリコフスキィ	80	1788－1795
	賃借人　同上(？)	21	1777	27	スイチン	63	1791－1796
	賃借人名クレエン	170+3	1777－1784	28	クルイロフと仲間達	15+2	1792－1794
10	サンクト・ペテルブルグ軍団	4	1774－1775	29	よその土地の非改革派信者団	37	1793－1796
11	鉱山学校	73+1	1777－1781 1786－1793	30	芸術アカデミー	6	1794－1796
				31	プラヴィリシチコフ	23+1	1794－1796
12	ヴァイトブレヒト & シノール	59+3	1776－1781	32	医事参議会	55+1	1796－
				33	ブルンコフ	19	1796－1800
13	ヴァイトブレヒト	16	1781－1785	34	県庁付属印刷所	46+1	1797－
14	シノール	238+9	1781－	35	印刷所名不明	275+1	
15	ハルダロフ	3	1781－1789				

（文献.23及び24により作成）

〔表14—2〕〈モスクワ〉19印刷所（プラスの数字は年毎の雑誌・継続出版物の合計）

	印刷所名	点数	活動期間		印刷所名	点数	活動期間
1	宗務院	76+3		8	マイヤー	23	1783−1786
2	元老院	92+1	1728−1777	9	秘密印刷所	11	1783−1787
	賃借人マイヤー	10	1778−1779	10	ギッピウス	7	1783−1792
	賃借人ギッピウス	79	1780−1784	11	印刷商会	298+6	1785−1792
	賃借人名なし	5	1785−1786	12	ポノマリョフ	161+1	1785−
	賃借人オコロコフ	135+1	1785−1786	13	アンネンコフ	22	1787−1789
	賃借人セリバノフスキィ	1	?	14	県庁印刷所		
3	モスクワ大学	728+34	1756−1779		賃借人ギッピウス	4	1787−1789
	賃借人ノヴィコフ	642+29	1779−1789		賃借人スヴェチコフ	1	1790
	賃借人スヴェトゥーシキン	21+1	1789(5-8月)		賃借人名なし	5	1793−1797
	賃借人クラウディ他	422+20	1794−1800		賃借人レシェトニコフ	107	1798−1805
	賃借人クラウディ	14	1800−1801	15	ヴァイス	3	1789−1790
	賃借人リュービ他2名	7	1802−1804	16	レシェンニコフ	229	1789−1797
4	軍事参議会(支所)	18		17	ゼデルバン	25	1791−1795
5	劇場付属			18	セリヴァノフスキィ	64	1792−1796
	賃借人クラウディ	102	1784−1794	19	ゼレンニコフ	46	1793−1796
6	クラウディ	26+1	1793−1795	20	印刷所名なし	57	
7	ロプーヒン	51+1	1783−1786				

（文献23及び24により作成）

〔表14—3〕〈地方都市〉（プラスの数字は年毎の雑誌・継続出版物の合計）

	都市名	現在の国名	印刷所名	出版点数	活動期間
1	アストラハン	ロシア	アルメニア大主教イオシフの印刷所	1	1796−1798
2	ウラジーミル	同	県庁印刷所	20+1	1797−?
3	ヴォロネジ	同	県庁印刷所	19	1798−?
4	ガッチナ	同	?	1	1799
5	カジーンカ	同	И.Г.ラフマニノフ印刷所	2	1791−1794
6	カルーガ	同	П.С.バトゥーリン印刷所	8	1785−1788
7	カルーガ	同	社会保護局と П.Е.コテリニコフ印刷所	19	1793−96
8	クリンツィ	同	Д.ルカヴィシニコフ印刷所	1	1784−
9	コストロマー	同	ニキータ・スマローコフ印刷所	10	1793−96
10	クルスク	同	クルスク社会保護局印刷所	15	1792−1795
11	ニージニィ・ノヴゴロド	同	県庁印刷所	12	1791−?
12	ペルミ	同	県令付属印刷所	2	1792−?
13	ルザーエフカ	同	Н.Е.ストゥルィスキィ印刷所	10	1792−96
14	スモレンスク	同	?	21	1795−?
15	タンボーフ	同	ヨハン・シュナイダー印刷所	1	1787−?
16	タンボーフ	同	А.М.ニーロフ印刷所	22	1788−96
17	トゥーラ	同	?	1	1790
18	トボーリスク	同	В.Е.コルニーリエフ印刷所	13	1789−94
19	ヤロスラーヴリ	同	?	14+2	1784−95
20	聖エリザヴェータ城塞	同	?	1	1764−65
21	ベルディーチェフ	ウクライナ	?	6	1794−95
22	ベルディーチェフ	同	カルメル会はだしの神父たちの印刷所	3	1793−1796
23	エカテリノスラフ	同	?	3	1793−?

24	キエフ	同	キエフ・アカデミー印刷所	24+4	1787－？
25	ニコラーエフ	同	黒海海軍工廠印刷所	15	1798－？
26	ハリコフ	同	社会保護局印刷所	4	1793－？
27	ポチャーエフ	同	ポチャーエフ印刷所	1	1799
28	ヴィテブスク	ベラルーシ	？	1	1799
29	グロードノ	同	？	1	1796
30	ポーロツク	同	イエズス会印刷所	1	1791
31	モギリョーフ	同	主教印刷所	2	1777，1781
32	ミンスク	同	県庁付属印刷所	1	1792－？
33	リガ	ラトヴィア	J.C.D.ミューラー印刷所	3	1791－1792
34	リガ	同	印刷所名なし	7	1778－1800
35	ヴィルナ	リトワ	ヴィルナ兄弟団及び大学印刷所	2	1796
36	ベンデールィ	モルドヴァ	Γ.A.ポチョムキンの移動印刷所	5	1790
37	ヤスィ	ルーマニア	同上	9	1790－91

（文献.23及び24により作成）

(3) 世俗文字による分野別の出版点数（1725－1800年）

分野別の出版点数は〔表15〕に示した通りだが，文学3,558点（37.7％），歴史1,047点（11.1％），宗教1,001点（10.6％）の3分野だけで合計が5,606点（59.4％）にのぼる。文学のうちロシア文学が1,865点，フランス文学が881点を占めている。ロシア文学は頌詩または頌詞が1,865点中1,007点と54％を占め，そのあとに散文183，詩集128，喜劇123，歌劇・喜歌劇69，悲劇53，正劇30，物語詩54，個別の民話30，寓話・箴言18，社会政治評論16点などと続いており19世紀以降とは様相を異にしている。頌詩または頌詞を捧げられた対象別の点数はエカテリーナ2世368，パーヴェル1世109，エリザヴェータ32，アンナ23，ピョートル1世9，ピョートル3世7，政治家・軍人193，ロシアの武器の勝利68，作家11，演劇人4点などである。フランス文学の分野別点数は散文583，詩34，喜劇138，正劇35，悲劇31，その他の演劇15，社会政治評論12点などである。

出版部数に関しては科学アカデミー印刷所の出版物に記録が残されているものが多い。部数が判明しているものを大まかに示すと20～200部228点（そのうち科学アカデミー105点），203～584部309点（同255点），600部228点（同171点），603～1,193部188点（同131点），1,200部193点（同132点），1,203～2,750部151点（同108点），3,000～30,000部88点（同20点）である。3,000部以上の大量部数のものはほとんどが教科書である。

1725－1800年の世俗文字による出版物のうち何らかの外国語から翻訳したものと判断できるのは2,912点である。その内訳はフランス語1,520（122），ドイツ語623（50），ラテン語295（19），イタリア語120（22），ギリシャ語69（6），英語66（9），ポーランド語22，中国語及び満州語14，スウェーデン語7点その他で，カッコ内の数字は著者，書名，版次から判断した点数である。この他にも明確に記されてはいないが翻訳書ではないかと考えられる外国人の著作があるので，実際の翻訳書の数は2,912点をある程度上回る。

ここでは最も点数の多いフランス語からの翻訳文献についてだけふれておきたい。1,520

点にはルソー18，モンテスキュー7，ヴォルテール69，ディドロ10，ダランベール3，百科全書からの部分訳7点などフランス啓蒙思想家の著作も含まれている。年代不明の5点を除く10年ごとの出版点数を見ると，1720－1730年は1点のみ。1731－1740年は6点で，トレジアコフスキィが翻訳したイタリア喜劇38点やドイツ語14点のほうが上回っている。その後1741－1750年は7点だが1751－1760年には20点と増加し始める。そしてエカテリーナ2世が登場した1760年代以降は1761－1770年189点，1771－1780年231点，1781－1790年515点と急増する。だが1791－1800年は336点，1797年以降だけを見ると99点と急減している。これは1789年のフランス革命以降の状況に危機感を強めたロシアが1792年7月にフランスとの国交を断絶し，1796年9月9日，1798年5月17日，1800年4月18日の3回にわたって「フランス書籍輸入禁止」の勅令を出したことによる。

〔表15〕世俗文字による分野別の出版点数（1725－1800年）

順位	分野	点数	%	順位	分野	点数	%
1	文学	3558	37.7	7	軍事，軍事科学	375	4.0
	ロシア文学	1865	19.8	8	文化，学術，教育	295	3.1
	フランス文学	881	9.5	9	自然科学	276	2.9
	ドイツ文学	229	2.4	10	技術，工学	229	2.4
	イギリス文学	157	1.7	11	保険，医学	227	2.4
	イタリア文学	140	1.5	12	地理，地域研究	223	2.4
	児童文学	91	1.0	13	書籍目録，暦	189	2.0
	古典古代	61	0.6	14	経済，経済学	148	1.6
	その他	121	1.3	15	農林業，農学，林学	128	1.4
2	歴史，歴史学	1047	11.1	16	芸術，芸術学	109	1.2
3	宗教	1001	10.6	17	遊び，手品，占い	94	1.0
4	国家と法，法学	502	5.3	18	民間伝承，民俗学	42	0.4
5	哲学，心理	455	4.8	19	文芸学	23	0.2
6	言語	387	4.1	合計		9429	100

（文献.23及び24により作成）

(4) 世俗文字による出版点数とキリル文字による出版点数の年代別比較

世俗文字，キリル文字それぞれの単行本について冊数は別として出版点数で見る限り1760年までは両者の間にそれほど大きなひらきはない。大きな差が生じ始めたのはモスクワ大学印刷所の運営が軌道に乗ったことによる。1779－1792年はノヴィコフ，1794年以降はクラウディの旺盛な出版活動に負うところが大きい。1783年2月の勅令で私営印刷所設立が可能になり世俗文字による出版点数はさらに増加するが，1796年9月16日付けの勅令で私営印刷所は閉鎖され出版点数は減少している。

ただし多巻物に関しては第1巻のみをカウントし，第2巻以降は考慮していない。多巻物は300点以上あり，なかには20巻に及ぶものもある。したがってこれらを考慮すると出版点数に対して出版巻数は大幅に増加する。

〔表16〕世俗文字（9,793点）及びキリル文字（1,328点）による年代別出版点数

年代	世俗	キリル	年代	世俗	キリル	年代	世俗	キリル	年代	世俗	キリル
			1731	15	3	1741	19	17	1751	18	11
			1732	15	8	1742	33	43	1752	15	14
			1733	31	5	1743	40	13	1753	19	11
			1734	32	6	1744	22	31	1754	19	22
1725	8	22	1735	22	5	1745	23	22	1755	26	11
1726	9	12	1736	17	3	1746	18	13	1756	32	12
1727	2	7	1737	19	4	1747	16	25	1757	29	6
1728	9	2	1738	20	3	1748	22	13	1758	25	22
1729	6	1	1739	19	6	1749	9	18	1759	37	20
1730	7	5	1740	21	6	1750	15	22	1760	56	13
小計	41	49	小計	211	49	小計	217	217	小計	276	142

年代	世俗	キリル	年代	世俗	キリル	年代	世俗	キリル	年代	世俗	キリル
1761	55	7	1771	148	22	1781	216	16	1791	334	17
1762	110	26	1772	123	10	1782	229	33	1792	351	17
1763	123	36	1773	174	14	1783	233	17	1793	373	30
1764	131	34	1774	208	8	1784	225	17	1794	306	30
1765	197	79	1775	199	10	1785	221	19	1795	299	23
1766	143	18	1776	160	24	1786	275	16	1796	315	19
1767	103	16	1777	161	17	1787	377	22	1797	214	23
1768	134	16	1778	198	39	1788	435	25	1798	290	25
1769	129	18	1779	247	32	1789	342	20	1799	308	24
1770	135	4	1780	245	15	1790	327	13	1800	255	20
小計	1260	254	小計	1863	191	小計	2880	198	小計	3045	228

（文献.23，24及び25により作成）

(5) 外国語による出版

最後に見落とされがちなロシア帝国内の外国語による出版物について『18世紀ロシアでの外国語出版物総目録』第1－3巻（文献22）に基づいて作成した〔表17〕により単行本の主要な部分を言語別，年代別，都市別一覧表で示しておきたい。定期刊行物，継続出版物については『外国語出版物総目録』の第4巻（定期刊行物，継続出版物）が，また分野別の分類も第5巻（索引）が未刊のため省略する。外国語による出版活動はペテルブルグ，モスクワ，リガ，ターリンの4都市にほぼ集中していたが下記の都市でも行われていた。

〈ロシア〉ケーニヒスブルグ；**〈ウクライナ〉**リヴォフ；**〈リトワ〉**ヴィルナ；**〈エストニア〉**デルプト（タルトゥ），レーヴェリ（ターリン）；**〈ラトヴィア〉**ミタウ（エルガヴァ），ルイナ，ウェンデン（ツェシス），サリスブルグ（サラツグリヴァ）。

外国語による出版活動は2つのタイプがある。ひとつはロシアの学問と文化水準をアピールするため外国向けに主としてペテルブルグとモスクワで出版されたもの。このタイプの出版物は対応する世俗文字によるロシア語版とほぼ同じ年に出版されている。例えばロモノーソフの著作の独語版6点，ラテン語版8点，仏語版1点が出版されている。もうひとつのタイプはラトヴィアやエストニアで私営印刷所の商行為として出版されたもの。リガ

ではロシアの支配下に入る1588年から出版活動が行われおり，独自の出版文化の発展を遂げている。その好例としてリガにおいてドイツ語で出版されたケーニヒスベルク出身のドイツの哲学者I.カント（1724－1804）の一連の著作を挙げることが出来る。一連の著作とは「純粋理性批判（全2巻）」の初版（1781），改訂第2版（1787），改訂第3版（1790），第4版（1794），『実践理性批判（全2巻）』の初版（1788），第2版（1792），第4版（1797），『道徳形而上学原論』の初版（1785），第2版（1792），第3版（1796），第4版（1797），『プロレゴメナ（哲学序説）』（1783）など8タイトル17点に及ぶものですべてハートノッホ社の出版である（文献22，p.80－82）。これらカントの著作は18世紀のロシアでは露訳本の出版はされていない。

外国語の出版物はドイツ語が67.3%を占めており世俗文字による出版とはまったく別の様相を呈している。フランス語は13.7%，ラテン語は12%である。以上3言語が93%を占めていたが，イタリア語，ギリシャ語，スペイン語，ポーランド語などその他の言語で出版されたものも7%あり18世紀ロシアはここでも様々な言語，文化との接点を持っていた。

〔表17〕外国語による出版物の年代別・言語別・都市別一覧表（1701—1800）

年代	ペテルブルグ								モスクワ							
	科学アカデミー				その他の印刷所				モスクワ大学				その他の印刷所			
	独	仏	羅	他	独	仏	羅	他	独	仏	羅	他	独	仏	羅	他
1701－10																3
1711－20					6	1	1	1					1	0	1	0
1721－30	14	4	9	1	12	1	1	2					0	0	2	0
1731－40	100	7	22	8	5	1	2	0					2	0	1	0
1741－50	24	8	32	4	2	0	0	0					0	0	0	1
1751－60	18	8	27	18	2	0	0	10	1	0	3	0	1	0	0	0
1761－70	73	32	28	15	21	12	5	2	14	4	25	3	0	2	0	0
1771－80	35	39	16	23	57	26	1	10	22	12	41	10	2	1	1	1
1781－90	14	12	8	1	116	57	11	13	5	6	16	0	4	6	4	1
1791－00	13	15	11	2	93	76	8	15	6	16	15	1	1	16	9	2
合計	291	125	153	72	314	174	29	53	48	38	100	14	11	25	18	8

年代	ラトビア				エストニア				4都市の合計				
	リガ（14印刷所）				ターリン（4印刷所）								
	独	仏	羅	他	独	仏	羅	他	独	仏	羅	他	合計
1701－10									0	0	0	3	3
1711－20	13	0	3	2	5	0	0	0	25	1	5	3	34
1721－30	21	0	2	1	15	0	2	1	62	5	16	5	88
1731－40	26	0	9	0	5	0	1	1	138	8	35	9	190
1741－50	15	0	0	0	4	0	0	1	45	8	32	6	91
1751－60	48	0	1	8	10	0	0	0	80	8	31	36	155
1761－70	105	1	1	8	29	2	1	1	242	53	60	29	384
1771－80	175	3	1	6	65	2	4	1	356	83	64	51	554
1781－90	222	3	2	10	41	0	1	0	402	84	42	25	553
1791－00	398	12	6	8	25	0	1	0	536	135	50	28	749
合計	1023	19	25	43	199	4	10	5	1886	385	335	195	2801

（文献22.により作成）

おわりに

所期の目的であるピョートル蔵書を軸にした17世紀から18世紀にわたるロシアの書籍文化についてその大状況は明らかにし得たものと思う。個々の項目で細部にふれていない部分は残るが，それらについてもすでに用意があるので新たな発表の機会を待ちたい。

ピョートルの死後，「ピョートル改革」支持者に対する弾圧という形で明瞭に表われた保守派の動きもピョートルの改革により大きく動き始めた歴史の流れを押し止める事は出来なかった。蔵書はただ単に数の多さが問題ではなく質の問題である。加えて社会への貢献という観点からすれば「ピョートル蔵書」の果たした役割の大きさは計り知れない。

為政者が反対者からの抵抗を受け，また揶揄や風刺の対象となるのは歴史の常である。アンリ・トロワイヤが歴史小説の中で描いたピョートル像は行動的だが破天荒でありゴシップの固まりのようにも映る。だがロシアの文献と資料をつぶさに調べてみるとピョートルは単に行動的だっただけではなく，その行動は旺盛な探求心と熱心な読書に裏打ちされた緻密なものであることが見えてくる。アンリ・トロワイヤの歴史小説はあくまでも歴史的事実を散りばめた創作であり，また最重要人物のヤコブ・ブリュースを他の人物と取り違えているなどの誤りもありこれにピョートルの伝記をゆだねてしまうのは歴史研究に携わる側の怠慢であろう。本稿ではこれまでの日本での研究で大雑把にあるいは不正確に語られてきた事柄についても資料に基づきより具体的かつ正確に描き出すよう努めた。

ピョートル研究に不可欠の原史料に『ピョートル大帝の書簡と文書』がある。この『ピョートル大帝の書簡と文書』は1872年に当時の国民教育大臣Д.A.トルストイ伯爵からのアレクサンドル２世への上奏によりピョートル生誕200年を記念して企画決定されたもので，1887年にペテルブルグの国立印刷所から第１巻が刊行された。以来，政治体制の何回もの激変や２度の世界大戦などの影響により刊行が長く中断した時期はあるものの企画は命脈を保ち続け，1992年に第13巻第１分冊（1713年１月－６月）がモスクワで刊行されている。第１巻から第13巻第１分冊までですでに19冊13,605頁におよび，詳細な註解とともに年月日，ピョートルへの差出人，ピョートルからの名宛人を明記して収録された書簡と文書は6,040点になる。このペースではピョートルが没した1725年１月までの完結を見るにはあと100年も先のことになりそうだがピョートルならではの大事業である。現時点では1713年６月までの史料ではあるが『ピョートルの書簡と文書』に基づいた研究は日本においては管見にふれていない。またアンリ・トロワイヤの歴史小説の原注でも参考文献として挙げられていない。かく言う筆者も時間の制約から既刊部分の索引全体を参照し，確認のため必要最小限の書簡を利用したにすぎないが，とにかく第一歩を踏み出した。

ボブローワは『ピョートル蔵書目録』を完成したのち1978年の刊行を待たずに世を去っている。その後「ピョートル蔵書」に関して第3節に掲げた３つの著作を超えるまとまった

研究はない。しかしながら1984年に発表されたホチェーエフ研究論文で，ソ連邦科学アカデミー図書館において新たに発見されたピョートルの蔵書1冊が紹介されている。標題は《Der Koenige in Franckreich Leben, Regierung und Absterben》で，ニュルンベルグにおいて1685年に刊行されたもの。ロシア語では『フランスの歴代国王はいかに生き，治め，死んでいったか』と訳されている。フランスの歴史に関する複数の大きな著作からその一部分が翻訳されたもので，おそらくは『フランス国王年代記』の編纂者である Guillaume de Nangis やフランスの歴史家アンドレ・デュシェーヌ（1584－1460）のテキストも含まれているという。革で装丁された表紙に《PETRUS PRIMUS. ZAAR. MOSCOVIE》，そして裏表紙には《ANNO 1718》とラテン語の文字が金で箔押しされている。ピョートルは特に高価な書物及び興味深い書物は「冬宮」内の寝室の隣の部屋に置いていたとの証言があるが，新たに発見された1冊もこの「隣室」に置かれていたものと見なされている。

「ピョートル蔵書」は1,800点以上，あるいは2,000点に及ぶのではないかとの推測もある。ムラゾーノワ，ルッポフ，ボブローワ等のような地道で息の長い研究による新たな発見と成果に期待を表明して結びとしたい。

文献

1. Академия наук СССР:Персональный состав, книга 1, 1724－1917. М., 1974.
2. Андреев, А. И., Петр в Англии. в 1698 г. －кн.: Андреев, А. И., Петр Великий:сборник статей. М. －Л., 1947.
3. Бакланова, А. Н., Великое посольство за границей в 1697－1698 гг. －кн.: Андреев, А. И., Петр Великий:сборник статей. М. －Л., 1947.
4. Боброва, Е. И., Библиотека Петра I:указатель-справочник. Л., 1978.
5. Богословский, М. М., Петр I: материалы для биографии. Том 2. Л., 1941.
6. Исторический очерк и обзор фондов Рукописного отдела Библиотеки Академии Наук:Вып. 1, XVIII век. М. －Л., 1956.
7. История Академии наук СССР. Том 1 (1724-1803). М. －Л., 1958.
8. История Библиотеки Академии наук СССР:1714－1964. М. －Л., 1964.
9. Лебедева, И. Н., Библиотека царевича Алексея Петровича. —кн.:Книга и книготорговля в России в XVI－

XVIII вв.: сборник научных трудов. Л., 1984. p.56-64.

10. Лебедева, И. Н., Личная Библиотека царя Федора Алексеевича. —кн.: Книгав России XVIII-середины XIX в.: сборник научных трудов. Л., 1989. p.84-92.

11. Луппов, С. П., Книга в России в XVII веке. Л., 1970.

12. Луппов, С. П., Книга в России в первой четверти XVIII века. Л., 1973.

13. Луппов, С. П., Книга в России в послепетровское время 1725-1740. Л., 1976.

14. О пребывании Петра Великого в Париже в 1717 году: из записок герцога де Сен-Симона. -кн.: Петр Великий: воспоминания, дневниковые записи, анекдоты. СПб., 1993, p.138-153.

15. Описание изданий гражданской печати. 1708-январь 1725 г. Сост. Т. А. Быкова и М. М. Гуревич. М. -Л., 1955.

16. Описание изданий напечатанных кириллицей: 1689 -январь 1725 г. Сост. Т. А. Быкова и М. М. Гуревич. М. -Л., 1958.

17. Пекарский, П., Наука и литература в России при Петре Великом. Том 1. СПб., 1862.

18. Пётр и Голландия. Русско-голландские научные и художественные связи в эпоху Петра Великого: сборник научных трудов. СПб., 1997.

19. Пётр и Голландия. Русско-голландские художественные и научные связи: К 300-летию Великого посольства. СПб., 1996

20. Пушкарева, Н. Л., Частная жизнь русской женщины невеста, жена, любовница(X-начало XIX в.). М., 1997.

21. Русский биографический словарь. СПб., Том 11.

22. Сводный каталог книг на иностранных языках, изданных в России в XVIII веке: 1701-1800. Т. 1-3. Л., 1984-1986.

23. Сводный каталог русской книги гражданской печати XVIII века: 1725-1800. Т. 1-5. М., 1962-1967.

24. Сводный каталог русской книги гражданской печати XVIII века: 1725-1800: дополнения... М., 1975.

25. Сводный каталог русской книги кирилловской п

ечати XVIII века. Сост. А. С. Зернова и др. М., 1968.
26. Сорокин, В. В., История библиотеки московского университета (1800－1917гг.). М., 1980.
27. С.И.ヴァヴィロフ(1891－1951)著／三田博雄訳『アイザク・ニュートン』1958，東京書籍。原著の初版はニュートン生誕300年を記念して1943年初頭に「偉人伝シリーズ」の1冊として刊行された。これはスターリングラードで第2次世界大戦の帰趨を決する激戦が展開されていた時期である。著者はモスクワ生まれの物理学者で1945年から没年までソ連邦科学アカデミー会長。
28. グリゴーリイ・カルポヴィチ・コトシーヒン著／松木栄三訳『アレクセイ・ミハイロヴィチ帝治下のロシアについて』－試訳と註(1)－から(6)まで，静岡大学人文学部人文論集第45号の1から第50号の1まで，1994－1999。

（注）

1. 残されているリストの55点はすべて外国語文献。医学・薬学は10点にも満たず，ラテン語版新約聖書，アリストテレス，タキトゥス，キケロ，クセノフォン，V.スカモッツィ他の宗教，歴史，哲学，数学，建築，鉱物学などの著作を含み蔵書構成には一貫性がない。（文献6，p.428－432）
2. 1716年にピョートルの意に反してアレクセイが出国しオーストリアのカルル6世に庇護を求めた事件。帰国後厳しい取り調べが行われアレクセイ及び協力者とされた者が謀反のかどで処刑された。
3. 1716年5月7日パリ到着から6月20日パリ出発までの記録。国王との会見を始め，ルーブル宮殿，チュイルリーの庭園，ヴェルサイユ宮殿，フォンテーヌブローの森ほかを訪問（文献14，p.142-151）。
4. прислуга という語は現在では「女中」の意味に使われているが，『11－17世紀ロシア語辞典』では「奉仕する人」ではなく「奉仕する行為」そのものを意味している。またコトシーヒン著『アレクセイ・ミハイロヴィチ帝治下のロシアについて』によれば王妃や皇女に対しては女官が様々な奉仕に携わっているが，それ以外は宮廷で奉仕にあたる官吏は全体的に男性であった（文献28，試訳と註（5）：第49号の1）。したがってここでは「奉仕担当者」の訳語をあてた。
5. 当初ナターリヤは自分の宮殿の生計費として年額4,351ルーブリ32コペイカと4分の3を受け取っていた。しかしピョートルは皇族の乱費を防ぐため各宮殿への生計費全体の見直しをする。そして1700年に姉妹及び修道院にいる妻への生計費を55,836ルーブリから35,401ルーブリに減額する。その結果ナターリヤの宮殿への生計費も2,500ルーブリと大幅に減少する（文献21，p.111）。
6. ボゴスローフスキィ著『ピョートル1世：伝記資料第2巻』（文献5，p.398－399）によれば雇用した外国人は4つのグループに大別される。第一はクリュイスを通じて雇用した626人：船長4，砲手23，尉官36，航海士17，副航海士15，医師52，掌帆長34，掌帆長助手32，海軍砲術下士官15，水兵344，司厨長4人，料理人4，閘門技師7，石工1，建築技師1，数学者で技師1，手工業者37（製粉工，大工，金細工師，鍛冶，製帆師，滑車師，充填師，彫刻師）。第二のグループは3人の船長とギリシャ人，スラヴ人，イタリア人たち。第3はイギリスで雇用されたグループ：レオナルド・フォン・デア・シュタム少佐と57人（鉄砲鍛冶，大砲鍛冶，砲兵，道路舗装技師，地下道掘削技師），その他の鉄砲鍛

冶13，船大工1，閘門技師ジョン・ペリーと通訳。第4のグループは4人：スウェーデン人砲手3，その他に時計師1（文献5，p.398−399）。第2のグループの人数に関しては具体的に示されていない。しかしながら雇用した外国人をロシアに送るために使節団が1698年4月7日に各60人用として契約した2隻の船に第2グループが乗船したことが記されている。1隻にはギリシャ人船長1と72人の集団が乗船し，他の1隻には様々な民族出身の手工業者と船員たち73人の集団及びギリシャ人船長1人とヴェネツィア人船長1人が乗船している。73人集団に第2グループ以外の職人が含まれているかどうかは不明だが，第2グループの人数は最大で73人と72人及び3人の船長の合計148人と考えられる（文献5，p.400）。

7. 『歴史学の諸問題』1994年3号のA.И.ユフト論文はピョートルとニュートンの直接の出会いがあったかのように記述しているがその典拠としているアンドレーエフの論文では「これまでのところ具体的な確証はない」と述べている（文献2，p.86）。

8. 「ローマ並びにロシア帝国の侯爵にしてオラニエンブルグの元首，ツァーリ陛下の首席顧問官，元帥，征服地司政官，象勲章及び黒鷲勲章等々の佩用者にして最も名誉あるアレクサンドル・メンシコフ卿へ

アイザク・ニュートンより啓上

貴下の皇帝陛下が御領土において最大の熱意をもって技術ならびに科学を奨励され，かつ貴下が軍事並びに文事の管掌においてのみならず，なかんずく良書と科学の普及においても陛下の補弼に御献身の御こと王立学会の聞知するところでありますだけに，閣下の最も高い御教養，科学に対する深い御造詣，また我が国民に対する御親愛から，わが学会に御加入下さるとの閣下の御意向をイギリス人商人を通じて拝承し，我々一同の悦びこれに過ぐるものはございません。当時，夏から秋の終りにかけて慣例により例会の開催を休止致しておりましたが，貴意を承りまするや，我々一同臨時に会議を開き，閣下の選出を満場一致で可決致しました。只今最初の例会で貴下の選出を公式に確認いたしました。学会書記局は文書を御送付申上げ，選出をお伝え致すしだいでございます。御健勝をお祈り申し上げます。

1714年10月25日 ロンドンにて」

ニュートンがメーンシコフに宛てたこの返書に関してはニュートン自筆のラテン語の草稿が3点残されており，そのうちの1点が1943年に王立学会からソ連邦科学アカデミーに寄贈されている。ここに掲げた訳文は伝記『アイザク・ニュートン』（文献27，p.252）でラテン語から露訳さらに日本語訳されたものを引用した。

9. ブリュースに関してはユーラシア研究所編『ユーラシア研究第19号』（1998）所収の拙稿「蔵書に見るヤコブ・ブリュース：あるピョートル大帝側近の実像」（p.50−55）を参照されたい。

10. гражданская печать については「俗用文字」，「非教会文字」等の訳語もあるが，教会と対する概念としての世俗を用い，ここでは「世俗文字」とする。「世俗文字」はツァーリであるピョートルをはじめ政府機関がまず用いたものであり，「民間文字」の訳語はその実態からしても不適切である。なお「民間出版」とするのはロシアの出版史の解釈に混乱をもたらす誤訳である。

（いわたゆきお・ロシア書籍文化史研究）

一橋大学社会科学古典資料センター *Study Series. No. 43*

発行所　東京都国立市中２－１
一橋大学社会科学古典資料センター

発行日　2000年３月31日

印刷所　岐阜市三輪プリントピア３
株式会社コームラ